小田原古式消防調査報告書

第１版　令和７年３月
第２版　令和８年７月

小田原市教育委員会

例言

・小田原古式消防調査（以下、本調査）は、小田原市無形文化財（民俗）の指定にかかる事業の一環で実施した。これは令和五年（二〇二三年）一月一六日に鳶職組合から「文化財指定に係る申請書」を要望書として提出されたことに端を発する。しかし、小田原古式消防は、その全体像を示す報告例がなく、その価値を顕在化するため、文化財課による調査を開始した。

・本調査では、纏振り、木遣、階子乗りの稽古と出初式、北條五代祭りの様子を記録した。また、かつての姿についての聞き書き調査、道具の記録、新聞記事などの文献調査を行った。本稿では、紙数の問題から、これらの調査記録のすべてを掲載することができないため、概要としてまとめるものである。

・本稿は単独の報告書として刊行を予定しておらず、『小田原市郷土文化館研究報告』に寄稿するため、同研究報告の形式で作成した。図版、資料は同研究報告では紙数が足りないため、本稿のみで使用する。なお、後述の「鳶職木遣採譜所見」（寺田真由美）は、同研究報告に収録していない。

・本調査にあたり記録を文化財課主任保坂匠、写真撮影を同課主任（令和六年（二〇二四年）度主査）鳥居紗也子、映像撮影を保坂匠が行った。また本書の執筆・編集は保坂匠が行った。

・調査日時、内容は次の通りである。

令和五年四月二四日（纏振り、木遣稽古）、同年十月一七日（木遣稽古）、同年一二月五日（階子乗り稽古）、令和六年（二〇二四年）一月四日（階子造り）、同年一月一一日（小田原市消防出初式）、同年五月三日（北條五代祭り）。

・昭和四七年（一九七二年）の録音テープが見つかり、現状や他地域と比較するため採譜を行った。採譜は、京都芸術大学非常勤講師、相模女子大学非常勤講師、玉川大学非常勤講師、および横浜市無形民俗文化財保護団体育成検討会検討委員寺田真由美に依頼した。また本書所収の「鳶職木遣採譜所見」を執筆いただいた。採譜した曲目は次のとおりである。

「真鶴」（「ＣＤ木遣り集」昭和四七年二月制作）、「真鶴・手古」（文化部研修大会第二六回、小田原鳶職組合、平成二六年録音）、「真鶴・手古」（文化部研修大会第二六回、川崎、平成二六年録音）、「真鶴・手古」（令和五年小田原鳶職組合木遣唄稽古）

・本調査で収集した資料、撮影した写真、映像は文化財課で保存する。

・最後に、調査にご協力いただいた鳶職組合、古式消防参加者の皆様、また調査、執筆にあたり昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科教授であり小田原市文化財保護委員の大谷津早苗氏にご指導いただいた、この場を借りてお礼申し上げる。

・誤記、用語の修正を行い第２版を発行した。

目次

1　はじめに・・・

1　はじめに

古式消防は、江戸時代に遡る消防活動を由来とした鳶職に残る芸能である。

小田原には、この古式消防が現存している。江戸時代末期に存在した消防の伝統を継承し、「鳶職木遣」（以下、木遣）、「纏振り」、「階子（はしご）乗り」（常用漢字では「梯子」と表記するが、本稿では『小田原鳶職組合　創立一一〇周年記念誌』にある「階子」を使用する）で構成される。現在では主に小田原市消防出初式、小田原北條五代祭り（以下、北條五代祭り）で実演される。

古式消防の歴史は古く、江戸時代前半の町火消制度まで遡る。町火消制度は江戸時代、万治元年（一六五八年）を嚆矢とし、享保一五年（一七三〇年）に火消人足が半減されたことを契機に、町人主体から鳶人足を主体とする町火消の体制へと変わっていく[一]。古式消防が実演される出初式の起源は、明暦三年（一六五七年）の大火の後の万治二年（一六五九年）一月四日に老中稲葉正則が定火消（じょうびけし）を率い上野東照宮前で行った「出初」とされ、これを契機として毎年一月四日に上野東照宮で行われるようになり、次第に儀式化され慣例行事となり、今日の出初式に受け継がれているとされる[二]。このように、古式消防は江戸時代前半から始まった消防活動に由来し、都市部で破壊消防に従事する鳶職により伝播、伝承された。

全国的には発祥地である「江戸の鳶木遣」が昭和三一年（一九五六年）、「江戸火消しの階子（はしご）乗り」が平成一八年（二〇〇六年）に東京都無形民俗文化財（民俗芸能）に指定され、「仙台消防階子乗り」が調査報告書の刊行後、平成二九年（二〇一七年）に仙台市無形民俗文化財に指定されている。県内では厚木市で「古式消防」が昭和四六年（一九七一年）市無形民俗文化財指定、未指定ではあるが横浜市、川崎市、藤沢市、平塚市、秦野市、松田町、湯河原町で現存もしくは実施されていた。

小田原の古式消防は、江戸時代末期に存在し、当時相模国最大の都市であり江戸に程近い小田原の古式消防は比較的早い段階で始まり、規模が大きかったと想定される。

一　『江戸町人の研究』第五巻、一一五頁、一三〇頁
二　『東京の消防百年の歩み』、二一頁

2　小田原古式消防、鳶職に関する記録

小田原古式消防、鳶職の歴史について詳細な記録は残っていないものの、若干の古文書や片岡永左衛門が著した『明治小田原町誌』、新聞記事などから断片的に窺い知ることができる。

2-1　江戸時代

小田原市域において鳶職の名が初めて確認できる資料は、文政二年（一八一九年）一二月「小田原藩が領内の職人を統制する」[三]で小田原藩が統制する十三職に「鳶職」が挙げられている。一方、鳶職の消防参加は、文政一一年（一八二八年）「旧小田原藩町方火消纏雛形」（小田原市立中央図書館所蔵）からわかる。「旧小田原藩町方火消纏雛形」を見ると、小田原宿では町内毎の町方火消のほかに五十人組を組織していたことが示され、鳶職がこの五十人組を構成していたとされる[四]。

また、鳶職にかかる記載はないものの、『明治小田原町誌』明治二年（一八六九年）正月二〇日の項には「従来は」として、江戸時代末期の消防の体制について片岡の記憶が掲載されている。「従来は小田原宿拾九ケ町は各町に消防夫の設備あり、小町は凡廿人、大町は四十人位にて、各戸主は自身此任に当り、器具としては纏、高張提灯、竜吐水、指又、階子、鳶口、玄馬桶、手桶、釣屏等にて、其服装は名主組頭の町役人は袴を着し雲形唐草模様又は家紋なと其の好に随ひ染、或は縫模様したる胸当をなし、革又は木綿其他の火事羽織に家紋や模様を附たる火事頭巾を冠り、消防夫は其町の印を附し、木綿半纏に頭巾を着し、名主・組頭の指揮により消防に従事せり」[五]としており、当時の消防における道具や衣装が窺える。

2-2　明治時代

明治時代に入ってからの鳶職による消防を知り得る記録の初出は、『明治小田原町誌』明治二年正月二〇日の項に「消防組織を改正し、鳶職の者は拾人を以て消防夫となし、手当として壱ケ年拾五円、出場毎に壱人金弐銭の弁当料を給与なす事とな

三　『小田原市史　史料編近世Ⅲ藩領２』　№一〇八
四　『小田原鳶職組合　創立一一〇周年記念誌』、五一頁
五　『明治小田原町誌　上』、五六頁

れり」[六]とある。次いで明治一三年（一八八〇年）一二月の項に「鳶職、消防夫幷に巡査の役割を改正なす」[七]とあり、ポンプ一台、龍吐水二丁、引倒方それぞれに指揮役の巡査と実働の鳶に役割を分けていたことがわかる。また、明治一四年（一八八一年）九月一五日の項には「町立消防組を改正し鳶職の者八拾人と定め」[八]た。両記録から消防における鳶職・破壊消防従事者の重要性が窺われる。

芸能としての古式消防に関する直接的な記録はないが、同書明治二年一〇月一五日の項に「例年之通り火消揃をなせり」[九]とあり、現在の消防出初式に類する行事が行われていたと考えられる。次いで明治一七年（一八八四年）一月一七日の項に「各町有志消防組の始めて出初式を挙行し以後例となす」[一〇]とあり、この頃には出初式が行われていたことがわかる。その内容は不明であるが、明治四三年（一九一〇年）一月一三日の『横浜貿易新報』の記事「小田原　消防出初式」に、「小田原町全町の消防出初式は十一日午前九時より御用邸前広場にて挙行し、先づ本県警務課長代理岸本保安課長の点検あり夫より階子乗りありて次に例の注水試験の達磨落しあり終りを告げしは午後一時半頃なり」とあり、明治時代末には現在の小田原城址公園前の御濠端通りで放水と階子乗りが行われていたことがわかる。

鳶職については、明治二一年（一八八八年）一一月一五日に足柄下郡鳶職組合の結成について「鳶職組合規約御認可願」を鳶職惣代人二名と小田原幸町外四ケ町戸長、荻窪村外七ケ村戸長、板橋村外三ケ村戸長、酒匂村外三ケ村戸長の計六名の連名により神奈川県知事に提出し、明治二二年（一八八九年）三月一三日神奈川県知事からの認可を受けた[一一]。

2-3　破壊消防の終わりとその後の古式消防

大正時代以降も破壊消防が行われたことにより、消火活動において鳶職が大きな役割を果たした。しかし昭和一四年（一九三九年）四月に発布された「警防団令」により、鳶職が従事する消防組は防護団と統合され警防団となった[一二]。ただし、戦後も消防に鳶職が関わっていたとされ、鳶職のK氏（一九五八年生）の記憶では、昭和三年（一九二八年）生まれの父は、戦後すぐ昭和二五年（一九五〇年）くらいの頃に階子役で、仕事中に火事が起き、雇っていた若い衆に自転車二台を本町の家から出させて、その自転車二台に一本の階子を括り付け運び、国道を渡ったそうだ。ただし、当時既に纏は使っていなかったそうだ。また、破壊消防の本格的な終焉は昭和三六年（一九六一年）とされ、この年に破壊消防を担当する特設消防団を解散し、小田原市章金纏が贈られた[一三]。

出初式について、『横浜貿易新報』の大正六年（一九一七年）一月七日、大正七年（一九一八年）一月一二日の記事から、引き続き放水と階子乗りが行われていたことがわかる。しかし階子乗りを鳶職が行っていたと想定されるものの、直接的な記録はない。時代が下るが『横浜貿易新報』の昭和一二年（一九三七年）一月一二日の記事「合併消防出初式」に、「小田原町並に早川大窪両村合併消防出初め式は例年一一日挙行されたが本年は大日本消防協会松井博士の講演関係から十六日に延期されたので一一日鳶職一、二番組の階子乗りだけ行った」とあり、階子乗りは鳶職が実施しており、一月一一日に決められていたことがわかる。

大正一四年（一九二五年）四月、鳶職木遣の保存会である一聲会が組織され、喉に霊験があるとされる佐奈田霊社に石造真棒を奉納している。現在でも一聲会は鳶職により組織され活動している。

戦後の古式消防について、昭和二六年（一九五一年）一月二〇日の小田原市広報の記事「消防始式を行う」に「古式床しい纏振込みや梯子登りの演技があり」と記載されていることから、消防始式（現在の小田原市消防出初式）として継承されたことがわかる。その後、昭和四〇年（一九六五年）に始まった小田原お城まつり（現在の北條五代祭り）に初回から参加している[一四]。残念ながらお城まつりについて、昭和四〇年六月一日広報小田原には古式消防の記載は見られない。鳶職のO氏（一九五九年生）の話では、昭和六一年（一九八六年）まで階子乗りを行っていたそうだ。現在は鳶職で行列を組み、纏振りと木遣を歌いながら行進している。

六　同書、五六頁
七　『明治小田原町誌　中』、一六頁
八　同書、二六頁
九　『明治小田原町誌　上』、一〇四頁
一〇　『明治小田原町誌　中』、四五頁
一一　『小田原鳶職組合　創立一一〇周年記念誌』、二六頁
一二　同書、四〇頁
一三　『小田原鳶職組合　創立一一〇周年記念誌』、五〇頁
一四　同書、四六頁

この他、古式消防が実演される機会は、小田原宿総鎮守と呼ばれた松原神社の例大祭で、神社神輿の渡御の際に、鳶職が神輿の前で先導し、木遣を歌った。鳶職のY氏（一九六八年生）の話では、松原神社例大祭で神輿を載せた御所車を牛に曳かせており、鳶職が牛を曳く役、先導役を担っていた。神輿行列の先頭でジャランボウと呼ばれる木の棒を打ち付け先導する役が二人、その後ろに木遣を歌う鳶職が並び、その後ろが神輿であったそうだ。一〇年程前まで鳶が先導していたそうだが、平成二三年（二〇一一年）の東日本大震災による自粛による影響で体制が変わったものと思われる。なお、神輿を載せた御所車を使用していたのは、昭和三六年（一九六一年）から平成三年（一九九一年）までである[一五]。

余談ではあるが、鳶職に関する記事として大正九年（一九二〇年）一月七日の『横浜貿易新報』「小田原町の鳶職組合紛擾」に、鳶職組合員が出入の芸妓屋に雇われ三ヶ日間箱丁の代りとして芸妓の箱持をしたとして、組合内で問題になっている。K氏によると、出入について、ゴヒイキ（ご贔屓・ダンナ）とも呼び、近年まで数件付き合いがあったそうだ。前出の鳶職K氏は、四〇年くらい前になるが、駅前の眼科がゴヒイキで、息子さんの引越しの手伝いをした。その他小田原の街中にある医院や洋品店、塔ノ沢の旅館もゴヒイキだった。どぶ掃除なども手伝った。旅館は大掃除の手伝いをした記憶がある。どこも半纏をもらっていた。タテマエ（建前）の時も店半纏をもらった。タテマエをやった所がゴヒイキになることが多いそうだ。タテマエについて、Y氏の話で、父はタテマエだけで一年食べていける程であったそうだ。年間九〇件行ったことがある。Y氏の若い頃に、ご祝儀は多いとき七万円をもらった。オヤブンである父はその倍はもらっていただろう。若い衆は一万円とか五〇〇〇円が多かった。

以上のように、戦後には消防活動から破壊消防がなくなり、鳶職は消防活動から離れることになる。既に纏振りは消防活動で行われなくなっており、この頃には消防出初式でのみ見ることができた。しかし昭和四〇年（一九六五年）からは小田原お城まつりでも見られるようになる。

一五 『松原神社　明神會　二〇周年記念誌』、二一頁

3　伝承組織・稽古・準備

現在の小田原古式消防は、小田原古式消防記念会、特に木遣は一聲会が伝承している。両組織は鳶職が参加、運営しており、実質的には鳶職組合内部組織に近い形態である。

3-1　伝承組織

小田原古式消防記念会の設立は判然としないが、昭和三六年（一九六一年）に小田原鳶消防記念会の名称で結成[一六]された組織を改称したものと思われる。また松原神社境内の木遣塚と呼ばれる石造灯籠は、「小田原　鳶消防記念会」により「昭和四十一年四月吉日」に奉納されている。この灯籠に記銘された寄付者名から、当時の役職を知ることができる。元老二名、取締四名、組頭五名、副組頭三名、小頭三名、副小頭六名、纏六名、階子六名、刺又六名である。

現在は古式消防記念会と呼ばれ、三〇人程の鳶職で構成される。その役職は鳶職組合の古い役職名を使ったもので、実際は組合の組合長、副組合長、会計などが運営している。古式消防記念会の役職は組頭、副組頭、小頭、階子、纏、刺又、平組がある。実質の運営は小頭が行い、小頭を経験した者が相談役として副組頭になる。

また鳶職組合に入る前の若者組として若鳶会がある。若鳶会は昭和四七年（一九七二年）に結成された[一七]。若鳶会の役職は会長、副会長、会計、会計監査、レクリエーション、技能などがあり、順番に役職が上がっていき、会長を二年やると退会となる。入会は任意であるため、会員数が減り、現在は三人が参加している。K氏は、一八歳に仕事をはじめ、乗り子にならないかと声を掛けられ体験したが断った。しかし二〇歳になり若鳶会に入会すると乗り子になる決まりであった。若鳶会は鳶職になった人が入るが、入会した者は乗り子になるため、その年から乗り子になった。乗り子の役を終えると、木遣の稽古をする。

ただし乗り子は必ず若鳶会に入る必要はなく、消防団員の参加や、階子乗りが好きな人は若鳶会を退会後も長くやっていた。

一六 『小田原鳶職組合　創立一一〇周年記念誌』、五〇頁
一七 同書、五〇頁

3-2　稽古

古式消防の稽古は、年に三回行う。ここでは令和五年（二〇二三年）の稽古を紹介する。

・四月二四日から五日間、纏振り、木遣の稽古。鳶職組合二〇人と技能実習生二人が参加した。

調査日：令和五年四月二四日（月）

場所：（纏振り）松原神社境内、（木遣）境内の小屋

一九時一五分　調査員が松原神社に到着。すでに十五人集まっており、纏振りの稽古をしている。経験者が若手に振り方を見せながら教えている。

二〇時〇〇分　小屋で木遣の稽古。役員など熟年者十人が参加。途中二人が追加。「五萬石」、「駅路」を稽古した。手に手古棒を持ち、椅子に座って歌う。

二一時〇〇分　終了。組合長から挨拶。副組合長から連絡事項があり、草鞋が配られる。

・一〇月、木遣の稽古。一〇名程が集まる。

調査日：令和五年一〇月一七日（月）

場所：松原神社境内の小屋

一九時四〇分　小屋で木遣の稽古。鳶職組合員七人が参加。通しで歌う。通しは「手古」、「小車」。手に棒を持ち、椅子に座って歌う。稽古は二一時で終了。

・一一月二一日から一ヶ月間、階子乗り稽古。今年は二人が新人、一人が経験者である。K氏の話では、初めに肝つぶしを稽古する。K氏も若鳶会に入った頃は何週間も肝つぶしの稽古をした。

稽古用の階子は本番用の三分の一程度と半分の高さである。この階子は地面に固定して使用する。

調査日：令和五年一二月五日（火）

場所：酒匂川防災ステーション駐車場（小田原市寿町五-二二-三二）。

一九時〇〇分　乗り子二名が来て稽古を始める。

一九時二〇分　乗り子一名が来たため三名で稽古をする。

二一時〇〇分　終了

3-3　準備・階子造り

令和六年（二〇二四年）一月四日（木）

場所：松原神社境内（社殿裏）

参加人数：鳶職組合員一三人が参加

八時一五分　調査員が現地に到着した時、既に松原神社境内にて、階子造りが行われていた。一一時頃に作業終了。（八時一五分に木遣塚で木遣の三人が木遣の稽古をしていた。本日の新年会で歌う稽古とのこと）

工程

・竹、木材から階子の胴部とコマを切り出す。

・コマは面取りする。

・竹は上部と下部にホゾを切り、コマを通す。

・コマは一五本ネジで固定する。

その他：カギ（鳶口）の研磨

拝殿の軒下に完成した階子と古い階子を保管。小田原城保管の纏を移動し、拝殿内に保管。

4　小田原市消防出初式

小田原古式消防の実演は、小田原市消防出初式（以下、出初式）、北條五代祭りが主となる。特に出初式は一五〇年近い歴史をもち纏振り、木遣、階子乗りが実演されることから、本調査では出初式を中心に調査した。令和六年に調査した出初式の内容を次に記載する。

4-1　令和六年出初式の内容・行程

日時：令和六年一月一一日（木）

場所：松原神社～報徳二宮神社～三の丸ホール～蕎麦屋（正庵）～ミナカ～万葉の湯～松原神社

七時〇〇分　松原神社境内で準備。太子講の準備（三宝とお供えを設置）
準備は、階子に綱（ロップ）を結ぶ、階子、纏にウラジロ、ダイダイ、紙垂を紅白の紙紐で結ぶ。
八時二〇分　お祓い（松原神社拝殿にて松原神社宮司による祝詞奏上）
八時三〇分　組合長挨拶（拝殿前）
お清め（小頭が塩をまく、全員お神酒を飲む）
纏（二番）が纏振り。
階子乗り（田代、棚橋、荒木）、鉤持ち一二人。
階子を立て、鳶口で固定。木遣師が歌う。階子乗り中は木遣を歌う。
八時五〇分　終了。集合写真撮影。
九時〇〇分　太子講（松原神社境内西側の太子堂前）
松原神社宮司祝詞奏上。
玉串奉奠（組合長、年寄、副組合長、小頭、纏、組合員、若鳶、乗り子）
なお、太子講は年に三回、一月一一日、五月二一日前後の日曜日、九月二一日前後の日曜日に行う。
九時二〇分　纏、階子、鳶口を二宮神社へトラックで輸送。人は徒歩移動。
九時四五分　報徳二宮神社に到着、トラックから階子、鳶口、纏を下ろし、青銅の鳥居前で行列を組む（ラジオの生放送取材があるため、一〇時まで待機）
九時五五分　参道から拝殿前に移動。纏は中央最前列。纏を振りながら移動。
同時に木遣を歌う。
一〇時〇〇分　階子乗り（荒木、田代、棚橋）
一〇時五分　終了。階子を寝かせるまで、木遣は歌い続ける。
二宮神社から桝入りのお神酒が配られる。
三の丸ホールに移動。階子、纏、鳶口はトラック、人は徒歩で移動。
一一時五分　三の丸ホール「小田原市消防出初式」で古式消防として纏振りと鳶職木遣を実演。能登半島地震の影響により、直前で三の丸ホール前での実演から三の丸ホール小ホール内での実演に変更され、階子が高すぎることから階子乗りは実施できず。纏は四本を振り、舞台の両袖に市章纏を飾る。
一一時一二分　終了。蕎麦屋・正庵（小田原市本町一丁目九−二九）前へ移動。
道具は手持ちで移動。
一一時三〇分　店の入り口前五ｍほど北側で行列を組み、木遣を歌い始め、同時に纏を振る。
纏は店舗入り口前で国道一号線へ出る。
階子乗り（田代、荒木、棚橋）
階子を立て、鳶口で固定する。乗り子が階子を登り始めると纏を振るのをやめる。
一一時三五分　階子乗り終了。階子を倒すと、木遣を止める。
三の丸ホールへ徒歩で戻る。三の丸ホールから階子、纏、鳶口をトラックに乗せミナカへ移動。人は徒歩移動。
一二時〇〇分　ミナカ中庭（新小田原城下町）
二宮金次郎像向かって右側から入場し、金次郎像前に階子を立てる。
纏振りは二本（「一番」、「二番」）。
階子乗り（荒木、棚橋、田代）
一二時一〇分　終了。二宮金次郎像前で集合写真。万葉の湯へ移動。
一二時二〇分　万葉の湯南側五ｍほど手前から行列を組み、木遣を歌い始め、同時に纏を振る。
纏振りは二本（「一番」、「二番」）。
店舗入り口前で階子を立てる。
階子乗り（田代、荒木、棚橋）
一二時三五分　終了。
纏、階子、鳶口はトラックに積み込み松原神社へ移動。人は徒歩で移動。
纏は小田原城常盤木門の収蔵庫へ移動し、収納。

階子は松原神社拝殿の軒下に保管。鳶口は、太子堂内で保管。

一三時二〇分　松原神社境内に組合員集合。
組合長挨拶。
乗り子三人（荒木、田代、棚橋）の挨拶。
小頭挨拶。
一三時三〇分　全行程終了。

4-2　一九八〇年頃の出初式

四〇年程前（一九八〇年頃）の状況について、K氏から聞いた内容は次の通りである。

階子乗りについて、今は一本だが、K氏が乗っていた二〇歳から二七歳の頃は三本立てていた。当時は朝七時に松原神社に集合し、八時に国道から南側に行き荒久へ行った。その後小田原駅、魚国、バス通りを南に下り三時に松原神社で他の階子と合流する。その後鈴廣へ行き、最後にだるま料理店で他の階子と合流した。三本の階子はそれぞれ別のルートを廻り、出初式会場と三時の松原神社、最後のだるま料理店では三本が合流して乗った。

K氏が最後に乗っていた三〇年前頃に二本になって、一五年～二〇年前に一本になった。またY氏によると、三本の階子の一本は慰問に穴部の老人ホームなどを回った。二本になっても一本は慰問に行っていたそうだ。

4-3　例年の状況とコロナ禍（二〇二〇年）前後

例年、出初式会場は、三の丸ホール前で階子乗りを実演するが、令和四年（二〇二二年）は雨が降り三の丸ホールの中で行った。その前二年間はコロナ禍の自粛で実施しなかった。

令和五年（二〇二三年）は会場である三の丸ホール前の道でのみ行った。

コロナ禍以前は町の中をトラックで移動し、決まった場所で行った。

場所は三の丸ホールの前以外に、お得意様などである鈴廣や万葉の湯の前など三〇か所くらいで行った。

5　芸態

小田原古式消防は、現在鳶職木遣、階子乗り、纏振りで構成される。

実演されるのは、一月一一日の出初式で木遣、階子乗り、纏振り、四月神奈川県鳶工業連合会主催の物故者慰霊祭（大雄山最乗寺）で木遣、纏振り、五月三日の北條五代祭りで木遣、纏振り、一〇月神奈川県鳶工業連合会文化部研修大会で木遣である。特に出初式では行列を組み移動し、松原神社を起点とし、報徳二宮神社、出初式会場、商店前で実演される。この行列には、刺又が参加していたことが、木遣塚石碑や聞き書きからわかるが、現在は参加していない。

5-1　木遣

出初式では、纏振り、階子乗り実演中と出初式会場で歌われる。トオシ（通し）で一〇分程度の時間である。トオシの曲目は、「マナヅル（真鶴）」、「テコ（手古）」、「ボウグルマ（棒車）」、「コグルマ（小車）」であるが、出初式会場では「コグルマガシラ（小車頭）」も歌われ、纏振り、階子乗りの実演中よりも長い一五分程度をかけて歌う。

木遣を歌うのは、キヤリシ（木遣師）でアニとオトの二人である。アニが一句歌い、オトが二句目を歌う。そのほかの参加者はカワ（ガワ）と呼び、ステヤリを歌う。ステヤリは所謂合いの手である。カワの人数は決まっていない。また階子乗りの階子を支える鉤持ちもステヤリを歌う。

木遣は、鳶職の仕事で地固めをする際に真棒を引き上げ、落とす作業で力を合わせるために歌われた仕事唄とされる[一八]。Y氏の話では、現在では、仕事唄として歌われなくなったが、タテマエや結婚式、葬式で歌われる。タテマエは上棟式である。施主からご祝儀をもらい木遣を歌う。結婚式にも関係者に呼ばれて歌うことがある。その際にはご祝儀を出す側ではなく、ご祝儀をもらえる上にごちそうも頂ける。曲目は場面によって変わる。どんな場面でも初めに「マナヅル」、「テコ」を歌う。タテマエでは「ボウグルマ」を歌う。祝い事である結婚式や新年会では「エシ」、祝い事やイベントの最後には木遣ではないが「ノリト」を唱え、「マナヅル」を歌った後、手締めをしてお開きになる。不祝儀の通夜では「マツザカ」や「トオガネ」、

一八　高橋、二〇一三年、七頁

葬式では、「クロガネ」、「マツザカ」、葬式の当日に納骨していた頃は墓前でも「クロガネ」を歌う。太子講の直会の中締めでは、「クロガネ」を歌う。その他『小田原史談』二三五号に掲載された「鳶三代、高橋組」では、祝い事の際に「千秋万歳」、「君万歳」などを歌ったとある。なお祝儀、不祝儀であっても服装は、半纏であり、半纏が鳶の正装ということである[一九]。

祝儀などでは座敷で歌うため、手古棒を床に搗くように持ち三角形を描くように動かし調子をとる。棒を床に打ち付けるのは、昔真棒を落し地固めをするためにロープを引き上げ、ロープを離すタイミングであった。「ヨンヤーラーセ」の「セ」で、ドンとやり調子をとる[二〇]。

木遣の曲目については、昭和三二年（一九五七年）と昭和四〇年（一九六五年）作成された手書きの「きやり集」が保管されており、それぞれ曲数二四曲、二七曲が載録されている。また昭和四七年（一九七二年）に録音されたデータが遺されており、曲数二九曲である。現在歌われていない曲も、仕事、冠婚葬祭で歌われたものと想定される。曲目数の違いについては、他地域との交流による変化を検討する必要があろう。例えば、K氏の話では、昭和二〇年代に東京の木遣師を呼び江戸の木遣を習ったそうだ。これを裏付けるように昭和三二年（一九五七年）八月四日の『神奈川新聞』の記事「キヤリ音頭も勇しく」に佐奈田霊社に江戸消防記念会が詣でる際に、小田原の特設消防・一聲会が出迎え、合同で行列を組み木遣を歌ったとある。また、昭和の中期から末にかけて、横浜の木遣を参考にして稽古をしていたとの話もあった。今後の研究に期待したい。

5-2　階子乗り

階子乗りは高さ六・四mの階子の頂上と中ほどで手や足を離しバランスをとる技を行う芸能である。階子の頂上で行う技をチョウジョウゲ（頂上技）、上から三段目くらいで足を掛けて行う技をトチュウゲ（途中技）と呼ぶ。特に途中技の中で、ウグイスノヒモと呼ばれる輪状の紐を使う技をワッパと呼ぶ。

階子がかけられると、乗り子は階子の手前で草鞋を脱ぎ、「おねがいします」と叫び階子に向かって頭を下げる。そして階子の真ん中まで登ると勢いをつけ一気に頂上まで登る。

頂上に登り初めに行う技は、トオミである。次の技は乗り子が決め、途中技を行う場合もある。O氏の話では、技は3つ、4つの動きの流れで、一つの技である。例えば、最初は一本遠見、腹亀、肝つぶし、逆さ大の字をやる。帆掛は、腹亀から逆さ大の字、帆掛で一つの技である。トチュウゲのウグイスは、上を向く（かなびき一芸）、下を向く（谷覗き）、上を向いて決め（途中邯鄲）、肝つぶしでひとつの技である。一つの型（技と分けるため、便宜上型と呼称する）でも肝つぶしも外と中が、腹亀も回る、膝留めも回ったりするなどバリエーションがある。その他、昔はトイタガエシと呼ぶ技があったが今はやっていないとの事であった。

乗り子は一本の階子につき三人が必要である。三本の階子を立てていた時は九人必要であった。また一本の階子に鉤持ち（鉤は鳶口のこと）が一四人つき、階子の中央部、下段、最下段の三か所に鳶口の鉤をかけ固定する。

令和六年（二〇二四年）は階子一本の乗り子三人で実施された。

その際に実演された階子乗りの技は次の通りである。

・松原神社

一人目（一本遠見［一本遠見、肝つぶし］、帆掛［一本腹亀、逆さ大の字、帆掛］、枕邯鄲［枕邯鄲、一本腹亀、肝つぶし］、二本遠見、膝留め）

二人目（一本遠見［一本遠見、肝つぶし］、八艘飛び［八艘飛び、一本腹亀、肝つぶし］、鯱［鯱、逆さ大の字、胴鯱］、うぐいす［かなびき一芸、足首留め、谷覗き、途中邯鄲、かなびき一芸］）

三人目（二本遠見［二本遠見、肝つぶし、膝留め］、帆掛［一本腹亀、二本腹亀、逆さ大の字、帆掛］、うぐいす［膝留め、谷覗き］）

・報徳二宮神社

一人目（二本遠見［二本遠見、肝つぶし、膝留め］、うぐいす［膝留め、谷覗き］）

二人目（帆掛［二本腹亀、逆さ大の字、帆掛］、枕邯鄲［枕邯鄲、一本腹亀、肝つぶし］）

三人目（八艘飛び［八艘飛び、一本腹亀、肝つぶし］、鯱［鯱、背亀、肝つぶし］、うぐいす［かなびき一芸、足首留、谷覗き、途中邯鄲、かなびき一芸］）

・蕎麦屋・正庵

一九 高橋、二〇一三年、八頁
二〇 高橋、二〇一三年、八頁

一人目（二本遠見、膝留め、膝留め）
二人目（帆掛［一本腹亀、二本腹亀、逆さ大の字、帆掛］）
三人目（八艘飛び［八艘飛び、一本腹亀、肝つぶし］、鯱［鯱、一本背亀、二本背亀、肝つぶし］）

・ミナカでの階子乗りは記録できず。
・万葉の湯
一人目（二本遠見、膝留め、膝留め）
二人目（帆掛［一本腹亀、二本腹亀、逆さ大の字、帆掛］）
三人目（八艘飛び［八艘飛び、一本腹亀、肝つぶし］、鯱［鯱、二本背亀、一本背亀、肝つぶし］）

5-3　纏振り

纏は、火消の組を示す旗印であり、元来は先人の馬印として隊を統率するための戦争道具であった。江戸時代初期は武士により消火活動が行われ、与力、臥煙（がえん）役が大纏、小纏の纏持ちをした。町火消は当初纏ではなく、幟を使用したが、享保一五年（一七三〇年）に現在のような馬簾（ばれん）をつけた纏を使用するようになった[二二]。

纏振りは、纏振込みとも呼ばれ[二三]、階子乗りの行列の移動中に振り、また階子に乗る場所に到着した際には、階子を立てる場所を中心として時計回りに移動しながら振る。

振り方は、真竿の下部にカギ（蛙又）があり、ここを右手で持ちスナップを使いバレンが開くように回す。

一本のマトイに三、四人交代で一日廻る。マトイは全部で六本ある。「小」（一番）、「田」（二番）、「〇（わ）」（三番）、「ら」（四番）の頭（陀志）がある四本と小田原市章金纏、小田原市章銀纏（「若」）の二本で計六本である。

二二　山本、一九九三年、一一七頁、一一八頁
二三　『小田原鳶職組合　創立一一〇周年記念誌』、四五頁

6　道具

6-1　木遣

神奈川県鳶工業連合会文化部での発表会や本来の座敷で実演する際に三〇㎝程度（一尺か）の木製の棒、サシボウ（手古棒）を用いて調子をとる。稽古時には椅子に座るため、八〇㎝程度の棒を使用し調子をとる。

6-2　階子乗り

階子は、六．四ｍの長さがある。材料は支柱用の二本の青竹と踏ざんに木を使用している。竹の入手は竹屋から仕入れる。門松などを卸している業者で、そこに行って真直ぐで二本の太さがあう竹を選ぶ。踏ざん用の木は節がないものが良いが、現在、木材は値段が高いため、頂上部だけ節がないものを使う。支柱と踏ざんの固定はボルトを使い、その上からロップ（麻縄）をかける。Ｙ氏の話では、かつてはボルトではなく釘を割いて使ったそうだ。階子の制作は一月四日の午前中に行い、午後は新年会を行う。階子上部に銅板の筒「灰吹」[二三]を被せているが、一一日までに板金屋につけてもらう。またロップをかけるのと、お飾り（ウラジロなど）をつけるのは出初式当日の朝に行う。

稽古用の階子は組んであるものを保管しており、毎年同じものを使っている。高さは本番用の半分程度の物と、三分の一程度の二本がある。

階子を支える鳶口はカギ（鉤）と呼び、昔から使っているものを引き継いでいる。各家で持っている人もいるが、太子堂に保管しているものを使う人もいる。使っている鳶口は二種類あり、ナガエ（長柄）と普通の鳶口がある。ナガエは九尺（約三ｍ）で階子の真ん中にかける。普通の鳶口は六尺（約二ｍ）で階子の中段、下段にかけるために使う。

6-3　纏振り

纏は、令和六年（二〇二四年）の出初式に於て階子乗りの前や最中に「一番」一本、もしくは「一番」、「二番」の二本の纏を使用し、出初式会場では「一番」、「二番」、「三番」、「四番」の四本を振り、左右脇に小田原市章金纏、小田原市章銀纏（若

二三　同書、五二頁

鳶会）の二本を飾る。同年北條五代祭りでは、「一番」、「二番」、「三番」、「四番」の四本を振る。

現在使用していない古い纏も現存しており、稽古用も含めて九本の纏がある（表）。保管場所は、かつて、小田原城天守閣に展示していたことから、小田原城常盤木門の収蔵庫である。

小田原市章金纏は昭和三六年（一九六一年）破壊消防を担当する特設消防分団を解散した際に市から贈られた。小田原市章銀纏（若鳶会）は昭和四七年（一九七二年）若鳶会結成の記念に元衆議院議長の河野洋平氏から贈られた。「〇（わ）」（「三番」）の纏は、昭和三一年（一九五六年）小田原市と相海漁業から式場用と火事場用として二本寄贈された。相海漁業から贈られた纏は破損したため、昭和五八年（一九八三年）に当時の小田原市長山橋敬一郎氏により新調寄贈された。「ら」（「四番」）の纏は昭和四七年に若鳶会顧問の土屋賢太郎氏から寄贈された。[二四]

纏の部位名称は、上部の印部分（陀志）をアタマ、頭の下の振ると傘状に開く帯（馬簾）をバレン、竿は真竿、下部の手で持ち操作する逆Y字状の金属部（蛙又）をカギと呼ぶ。

纏の寸法は、アタマの形によるが、二二〇cmから二六〇cm、アタマは五五cm、バレンは七五cm、手持ち棒は一三〇cmである。火事で実際に使用されたとの伝承がある古手の纏は、現在の物より二〇cm程度小ぶりである。現在の纏は火事場で使用されなくなったため、式典用に大型化したものと考えられる。また稽古用の纏も出初式で使用するものより四〇cm小ぶりで、操作し易いように作られていると考えられよう。

7　衣装

全役で共通して半纏、帯、ドンブリ（腹掛け）、股引、草鞋掛け（足袋）、草鞋を着用する。

役職により半纏の意匠が異なる。襟と背の文字は、組合長（「組合長」、市章の中に「頭」）、副組合長（「副組頭」、丸の中に所属組）、小頭（「小頭」、丸の中に所属組）、鉤持ち（所属組、「階子」）、若鳶会（「四番組」、市章の中に「若」）、乗り子（レンガ模様の半纏、「若睦」、所属組）、年寄（所属組、五角形に所属組）、纏（所属組、「纏」）である。小頭以上の役職は半纏の肩から袖に赤い線が入るため、アカバンテン、アカスジバンテンと呼ばれる。

所属組は、「一番組」が小田原街中、「二番組」が小田原より西、「三番組」が川東、「四番組」が若鳶である。

また鉢巻は当日朝配布された小田原古式消防の手拭を使う。乗り子と鉤持ちはこれを頭に巻く。他の役は特に決まっていない。巻き方は所謂「ねじりはちまき」である。

8　まとめ

古式消防は、江戸時代に遡る消防活動を由来とする。小田原では鳶職により伝承され、現在は主に小田原市消防出初式、小田原北條五代祭りで実演される。ただし、当地で発祥した固有の芸能ではなく、江戸から伝えられたと考えられる。伝播時期は不明であるが、前述の通り、文政一一年（一八二八年）には纏が存在し、鳶職木遣、階子乗りも一〇〇年を超える歴史をもつことがわかっている。江戸時代の小田原は相模国最大の都市であり江戸に程近いため、県内の古式消防では比較的早い段階で始まり、規模が大きかったと想定される。都市部で継承されたことから継承事例が少なく、消防方法の近代化により衰退したため、現在まで保存されていることは希少性が高い。

さらに当地の古式消防は、関係資料が豊富に残されていることが特筆される。文政一一年に作成された「旧小田原藩町方火消纏雛形」をはじめ、『明治小田原町誌』中に、消防組織に関する記述がみられるなど、組織の変遷を追えることや、消防芸能の伝搬、都市としての小田原を考察する上で貴重な事例であろう。

二四　『小田原鳶職組合　創立一一〇周年記念誌』、五〇頁

	資料名称	点数	寸法（cm）	備考
1	纏「一番（小）」	１点	全高：220	稽古用か（比較的新しい）
2	纏「一番（小）」	１点	全高：240、陀志：75、馬簾：75、真竿：130、蛙又幅：10	劣化が激しい。古いものか。焦げはない。
3	纏「二番（田）」	１点	全高：220、陀志：55、馬簾：75、真竿：130、蛙又幅：10	劣化が激しい。古いものか。焦げはない。
4	纏「市章（金色）」	１点	全高：260	展示用。実際に振るには布製の馬簾に付け替える。
5	纏「市章（「若」銀色）」	１点	全高：260	展示用。実際に振るには布製の馬簾に付け替える。
6	纏「一番（小）」	１点	全高：260	現在使用している。
7	纏「二番（田）」	１点	全高：260	現在使用している。
8	纏「三番（〇）」	１点	全高：220	現在使用している。
9	纏「四番（ら）」	１点	全高：260	現在使用している。
計９本				

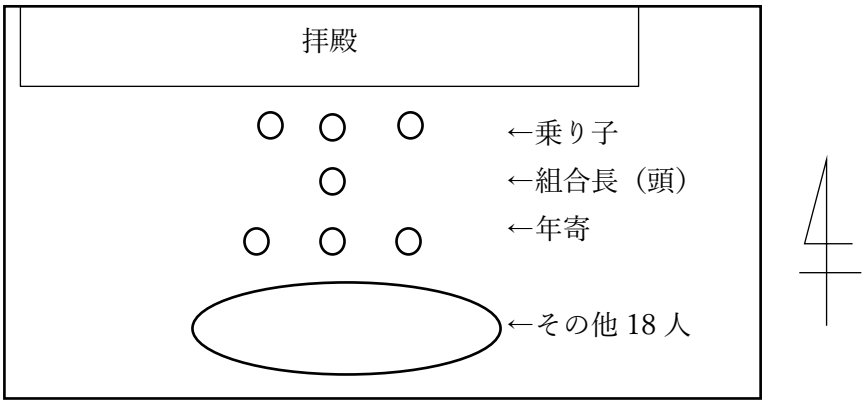
表　纏一覧（小田原城常盤木門保管）

９　参考資料

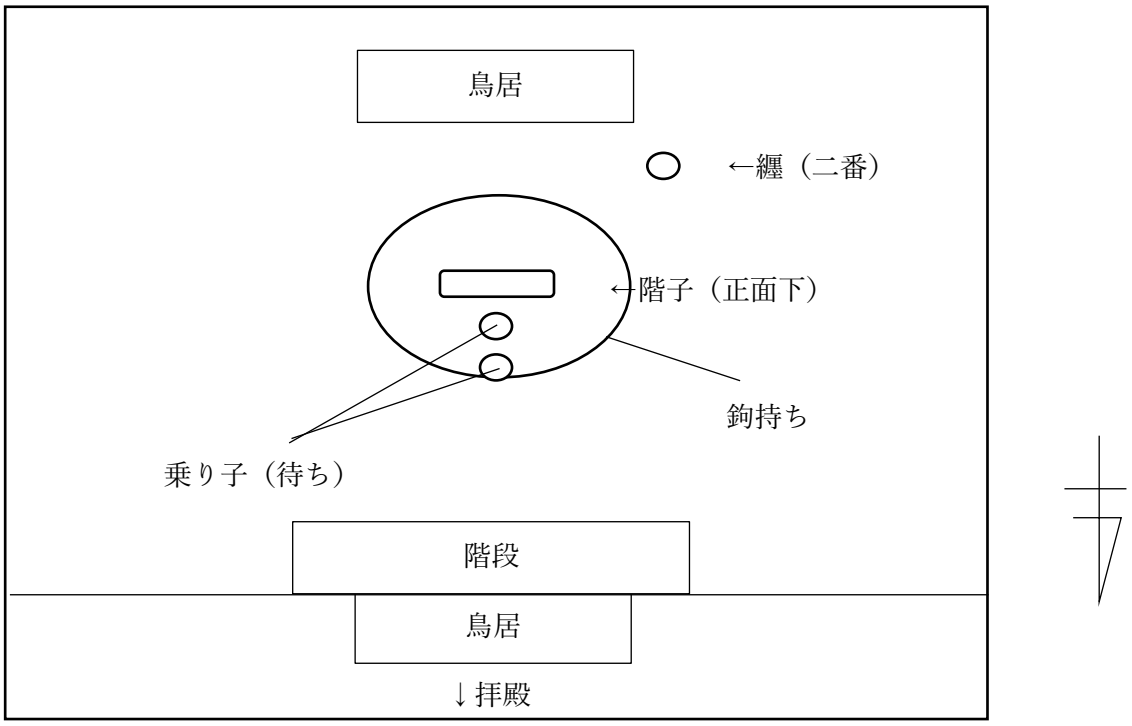
９-１　調査記録写真等

９-１-１　出初式参加者位置模式図・写真

松原神社・お祓い位置模式図



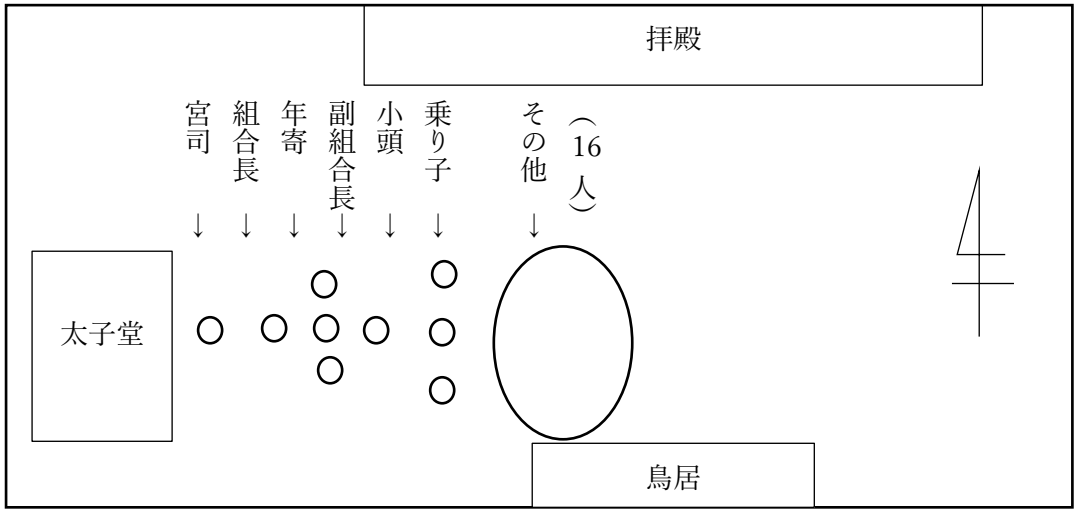
松原神社でお祓い（令和六年一月一一日、鳥居撮影）



階子乗り位置模式図（松原神社境内）

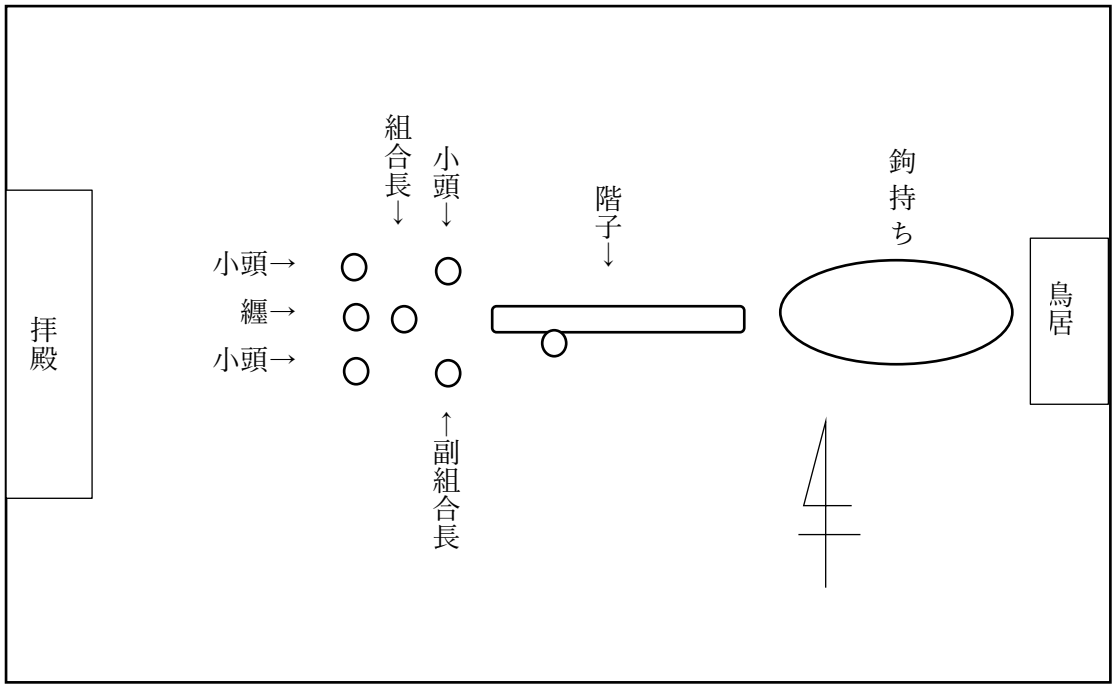
松原神社で階子乗り（令和六年一月一一日、鳥居撮影）

松原神社・太子講位置模式図



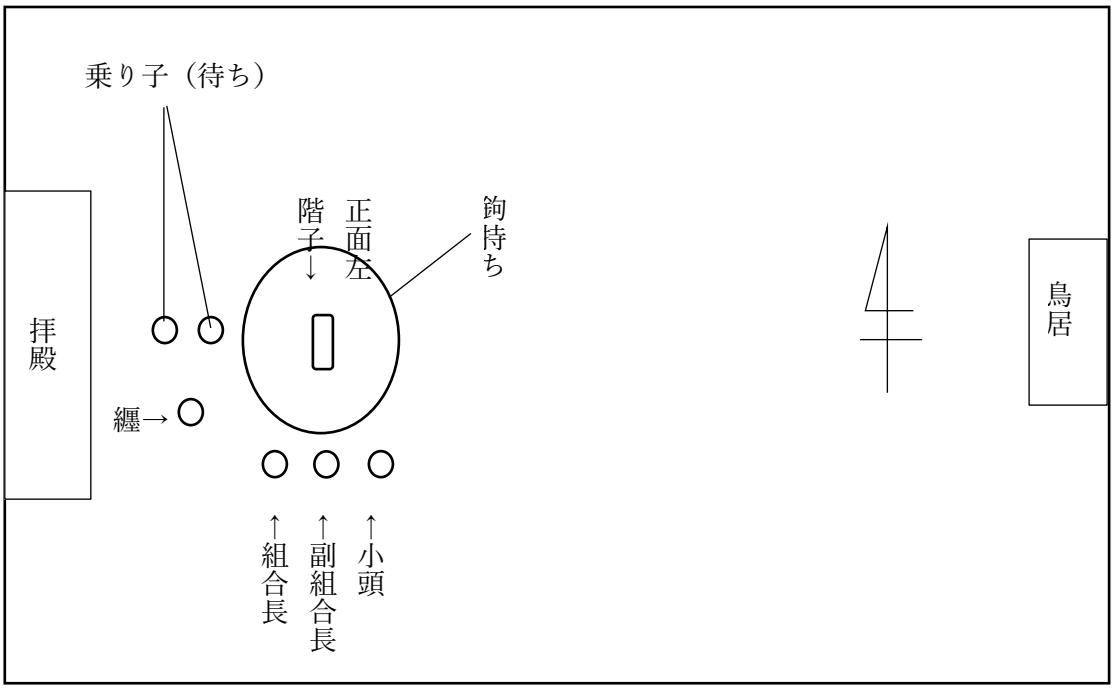
松原神社境内太子講（令和六年一月一一日、鳥居撮影）

報徳二宮神社・行列並模式図



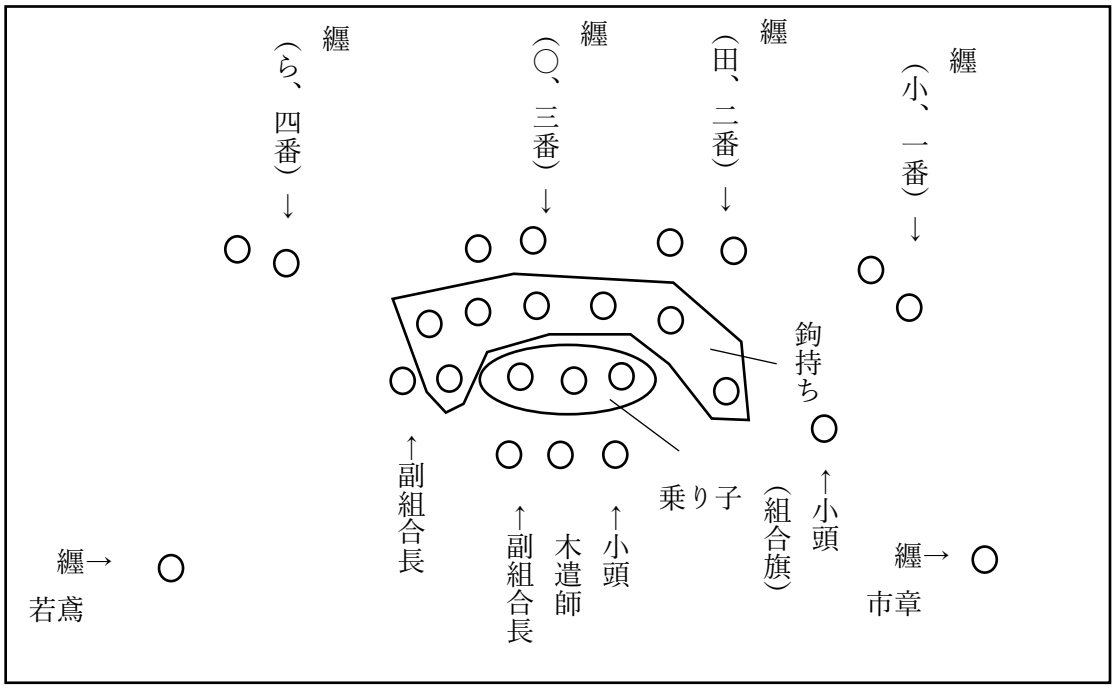
報徳二宮神社・行列（令和六年一月一一日、鳥居撮影）

報徳二宮神社・階子乗り位置模式図



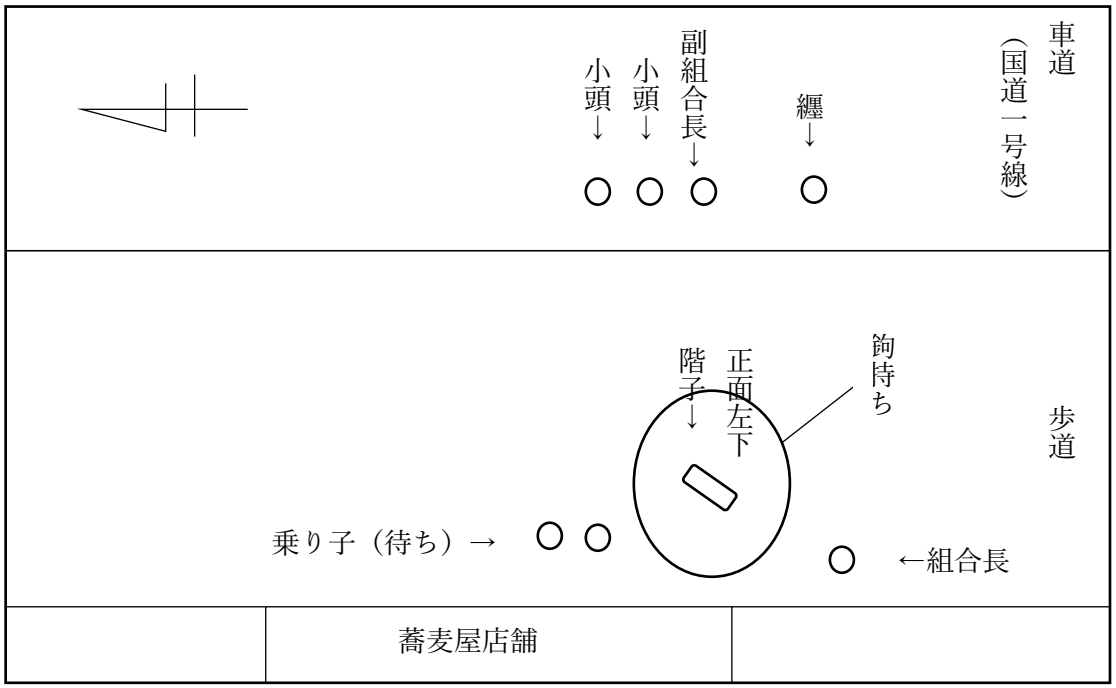
報徳二宮神社・行列（令和六年一月一一日、鳥居撮影）

出初式会場　木遣と纏振り位置模式図



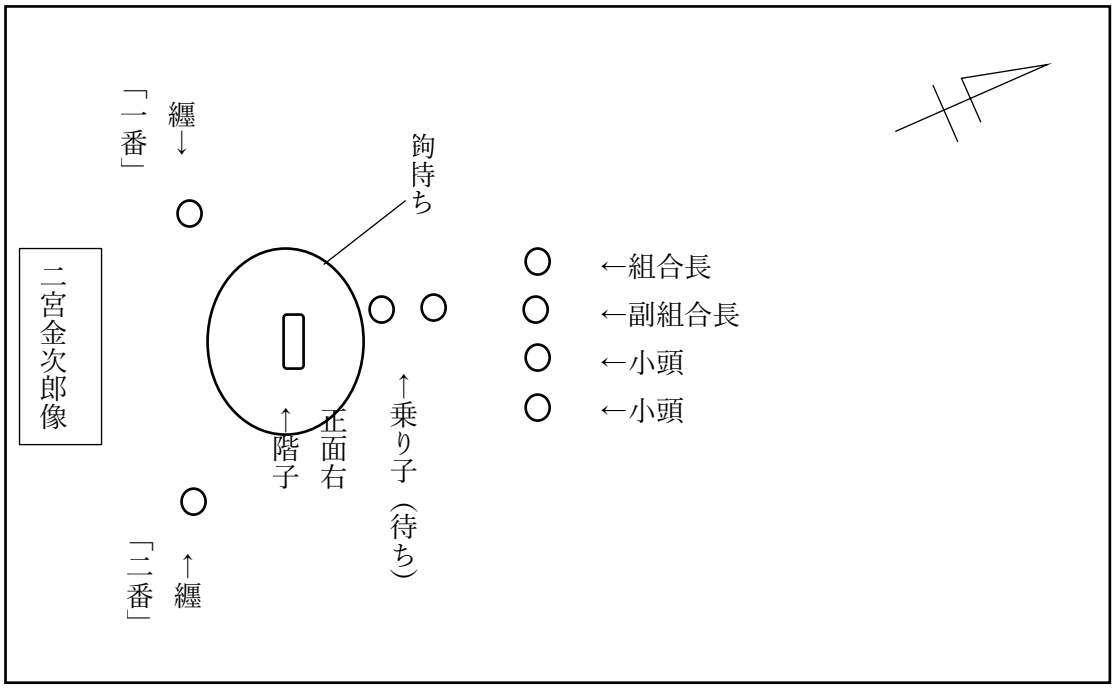
木遣と纏振り（令和六年一月一一日、鳥居撮影）

蕎麦屋・正庵（小田原市本町一丁目九−二九）階子乗り位置模式図



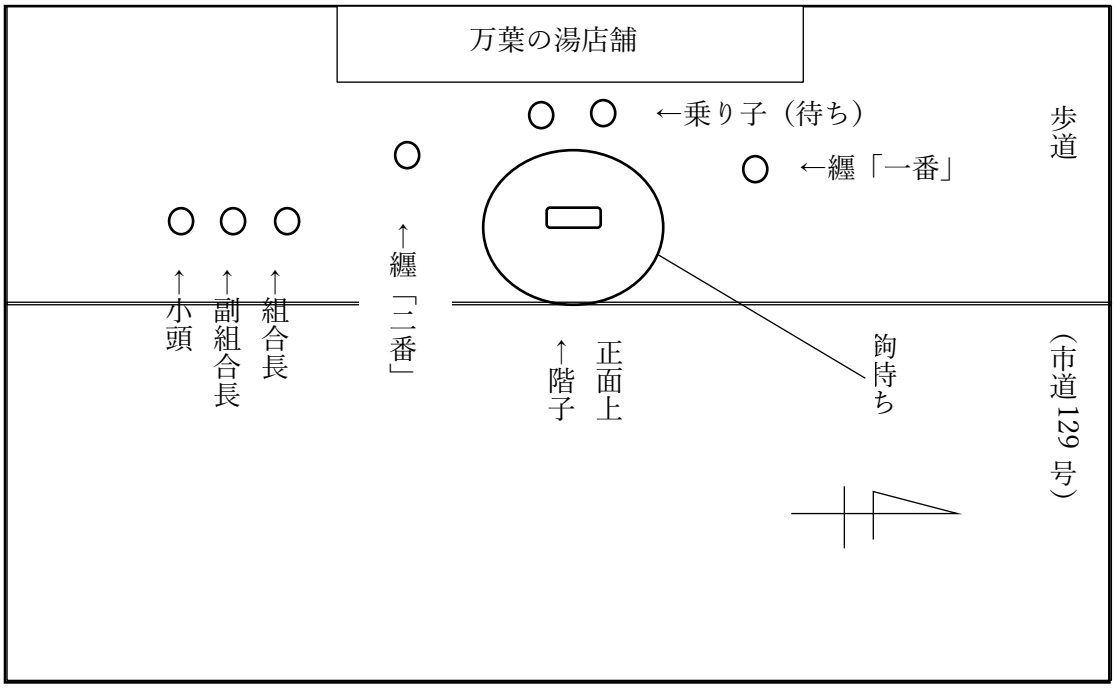
正庵前の階子乗り（令和六年一月一一日、鳥居撮影）

ミナカ・階子乗り位置模式図



ミナカ・階子乗り（令和六年一月一一日、鳥居撮影）

万葉の湯・階子乗り位置模式図



万葉の湯・階子乗り（令和六年一月一一日、鳥居撮影）

纏振り稽古（令和五年四月二四日、保坂撮影）

木遣稽古（令和五年四月二四日、保坂撮影）

木遣稽古（令和五年一〇月一七日、鳥居撮影）

階子乗り稽古（遠見）（令和五年一二月五日、鳥居撮影）

階子造り（令和六年一月四日、保坂撮影）

階子図面（令和六年一月四日、鳥居撮影）

9-1-3　小田原北條五代祭り・写真

行列と纏振り（国際通り、令和六年五月三日、鳥居撮影）

纏振り（三の丸小学校前、令和六年五月三日、鳥居撮影）

9-1-4　古式消防関係石造物・写真

木遣塚（石灯籠、昭和四一年（一九六六年）四月建立、松原神社境内）

石造真棒（大正一二年（一九二三年）四月建立、佐奈田霊社境内）

9-1-5　階子乗りの技

（令和六年出初式での階子乗りの技）

・ホカケ（腹亀→肝つぶし→逆さ大の字→帆掛）

（1）ハラガメ（二本腹亀）

（2）キモツブシ（肝つぶし）

（3）サカサダイノジ（逆さ大の字）

（4）ホカケ（帆掛）

カタカナ：小田原での呼称

（ひらがな・漢字）：参考呼称（『仙台市文化財調査報告書第432集　仙台消防階子乗り民俗文化財調査報告書』、小川建設「梯子乗り」ホームページより）

・シャチ（鯱）（鯱→逆さ大の字→胴鯱）

（1）シャチ（鯱）

（2）サカサダイノジ（逆さ大の字）

（3）シャチ（胴鯱）

・カンタン（枕邯鄲）（枕邯鄲→腹亀→肝つぶし）

（1）カンタン（枕邯鄲）

（3）キモツブシ（肝つぶし）

（2）ハラガメ（一本腹亀）

・ハッソウトビ（八艘飛び）（八艘飛び→腹亀→肝つぶし）

（1）ハッソウトビ（八艘飛び）

（2）ハラガメ（一本腹亀）

（3）キモツブシ（肝つぶし）

・ウグイス（かなびき一芸→谷覗き→途中邯鄲）

（かなびき一芸）

（谷覗き）

（途中邯鄲）

技を形成する型（便宜上「型」と呼称）

頂上型

・トオミ、イッポンドオミ（一本遠見）

・ニホンドオミ（二本遠見）

・ハラガメ（二本腹亀）

・ハラガメ（一本腹亀）

・セガメ（背亀）

・セガメ（二本背亀）

・キモツブシ（肝つぶし）

・ヒザドメ（膝留め）

・サカサダイノジ（逆さ大の字）

・ホカケ（帆掛）

・シャチ（鯱）

・シャチ（胴鯱）

・カンタン（枕邯鄲）

・ハッソウトビ（八艘飛び）

途中型

・（かなびき一芸）

・（谷覗き）

・（途中邯鄲）

・（足首留）

・ヒザドメ（膝留め）

9-1-6　階子乗りの技・古写真

・出初式のはしご乗り（撮影年不詳、お濠端通り、小田原デジタルアーカイブ）

・出初式（一九五八年、お濠端通り、小田原デジタルアーカイブ）

・出初式階子乗り（技・釣亀、昭和三〇年代、個人蔵）

9-1-7　衣装

・組合長（頭）

・副組頭

・小頭

・若鳶

・鉤持ち（カギ）

・乗り子

年寄

纏

9-2　鳶職木遣曲目・歌詞

9-2-1　鳶職木遣曲目

「きやり集」木遣保存会・木保睦編、一九五七年

曲目　歌詞前の題名

一　梃　梃（てこ）　（中間）
二　とびおけ　鳶おけ塚　（中間）
三　五尺　五尺手拭程よく染めた
四　駅路　駅路　（中間）
五　蝶々花　蝶々花
六　五萬石　五萬石
七　三河嶋　三河嶋　（中間）
八　鎌倉　鎌倉
九　布目　布目
一〇　遠鐘　遠鐘
一一　軽井澤　軽井澤　（中間）
一二　どん志ょ目　どんしょめ
一三　野曾木　野曾毘
一四　仝送り　野曾木送り
一五　八津志ょ芽　さんこの節　八津志ょ芽　（中間）
一六　小車　小車返し　小車　（中間）
一七　小車返し
一八　さん志ょの木
一九　黒鐘　清念寺　黒鐘　（中間）
二〇　湊　みなと
二一　ゑ志　えし割
二二　酒田　酒田
二三　田歌　田歌割　田う匁　（中間）
二四　日光　松坂　日光　（中間）

「きやり集」木保睦編、一九六五年

曲目	歌詞前の題名
一　梃（手古）子	「手古」てこ
二　駅路　駅路	
三　三河嶋　三河嶋	
四　野曾毘　野曾毘	
五　鎌倉　鎌倉	
六　五尺　五尺	
七　布目　布目	
八　小車　小車	
九　小車返し　小車返し	
一〇　軽井澤　軽井澤	
一一　蝶々花　蝶々花	
一二　五万石　五万石	
一三　遠鐘　遠鐘	
一四　黒鐘　黒鐘	
一五　山椒の木しおり　山椒の木しおり	
一六　どん志ょ目　どん志ょ目	
一七　野曾毘送り　野曾毘送り	
一八　鳶掛塚　鳶掛塚	
一九　酒田　酒田	
二〇　港　港	
二一　田歌　田歌	
二二　ゑ志　ゑ志	
二三　日光　日光	
二四　八津志ょ目　八津志ょ目	
二五　松坂　松坂	

録音データ・木保睦制作、一九七二年

曲目	読み
一　真鶴・手古	テコ
二　五万石	ゴマンゴク
三　五尺	ゴシャク
四　蝶々花	チョウチョウケ
五　駅路	エキロ
六　東金	トオガネ
七　布目	ヌノメ
八　三河島	ミカワシマ
九　鎌倉	カマクラ
一〇　さん志与の木	サンショノキ
一一　軽井澤	カルイザワ
一二　どん志与目	ドンショメ
一三　湊	ミナト
一四　酒田	サカタ
一五　黒鐘	クロガネ
一六　小車	コグルマ
一七　小車の返し	コグルマノカエシ
一八　八津志与芽	ヤッショメ
一九　さんこの節	サンコノフシ
二〇　野曾木	ノゾキ
二一　野曾木の送り	ノゾキノオクリ
二二　鳶掛塚	トビカケヅカ
二三　せいねんじ	セイネンジ
二四　田歌割	タウタワリ
二五　絵師割	エシワリ

二六　絵師　エシ
二七　田歌　タウタ
二八　日光　ニッコウ
二九　松坂　マツザカ

9-2-2　きやり集

①『きやり集　改訂版』、発行小田原木遺保存会、木保睦、昭和三二年九月（ガリ版印刷）

木遺目次

日本無形文化財指定

壱	弐	参	四	伍	陸
挺	どびかげ	五尺	驛路	蝶々花	五萬石
質	鉢	仇	拾	拾	拾
三河嶋	鎌倉	布目	遠鐘	どん志ん目	輕井澤
拾参	拾四	拾五	拾六	拾七	拾八
野曾木	仝送り	八津志ん茅	小車	さん志ん木	黒鐘
拾九	拾壱	拾弐	拾参	拾四	拾五
渓	ふん志	沖日	日歌	日光	

176

176

挺（てこ）

（田圃）

てこ

ら　おいやあ、ら　こおーせーえいえーえいえ
ーいほおーいやあーはの　棒車　れえーさら
ばあーやあーいるーうわえーあーあーら
ーらーおらーお、の　ふーおーいさーあーせれ
えーいーれらおいやーは　小車　らおうーやーあーあ
れーの　らーはーあそーおりやあやれこりや
はえーお　いらあーべれたえーやあーれーえの　お
めーえーろやあーれーえーーーーーーやあ
ーあららーおらの　ーおーほーいせーえーい
やあれーえらおいーさあやあれこれわ
の　やはれこれわーあれーおれーえわあーえ
いえーらいさやあれこーやはの

老念手

鼠かけ塚

（出雲）

向ふに見ゆるわ霞が関ら

花はおすけ川ぞ桜田御門

おいんかあぶあ拵おえこと。おおいいおいいぬえ

いやあ水えいえいえごえろおいかがあらあ

もおいい。奴のみぬ手あいあいすんはあそおいり

あはあ水わさんかおい。拵お忘やたおおいさ

やあえいいええいいえい。やあいあ水老えい

えいえいんやあらあんえの五本（三分三千秒）

やあいあ水まあいあい。奴あい

向ふに見ゆるうわい。かずけみ川があいせ

えいきぬいら。花わいあけえれけえぞおお。

いい桜田御参おいもおいん

注変印に注意番号順に返す

昭和廿二年九月十五日

木保睦

五尺手拭程ちゑ染めた

ごおこしやろうあ染めも染たらゆ仕ちゑ染めた

木保睦

五尺手拭程ちゝ染めた

やれ五尺ゝえこゝまだまだ

そりやどうこゝこれわいな

はゝゝありたりやさいこもの

うれゝ程ちゝやれ染めた

はあいゝやゝ

やれ

染めてくやゝやにせ紫も

元の白地にゝイ返せ

枝のイにはウの鳥が

小鮒へわえイびゝゝやゝ

御世は目出度の若松様ちゝ

枝も栄えて葉も繁る

ごおこしやちこ染めも染たら仲ちゝ染めた

やれ五尺ゝえこゝまだまだ

そりやどうこゝこれわいな

はゝゝありたりやさいこもの

うれゝ程ちゝやれ染めた

はあいゝやゝ

棒立ち（約貳分四拾秒）

駅路（中国）

鹿嶋立ちして其の日本橋。
槍を振り出す岳川より

（岳川より振り出す槍を振り出す岳川より）

やれ鹿嶋えいえーえ、立してえ、ーの其の日本
えーりゝ橋ゝりゝやはれわんしーの「さんしー槍を振り出す
す岳川ーの「やれ岳川よえいえーえ振り出すうー岳川よ
槍を振りいーすうー岳川よ

（そのおこたいほちん）

（ここ）

（約三分）

○句に梅沢酒匂を越えて小田原宿
○暮れて小田原提灯つけて明日は箱根を馬で越す
○箱根山にも名所多し　箱根の関所　箱根の宮神

昭三十五年九月　小田原木遺保存会　若槻氏の　木保睦

蝶々花

本拵より起す

御世は目出度ゝ芝松葉よ枝も栄えて葉も繁る

「こかげあふいでは」「はあやれこりや」「ねたえやあゝ」

ゝ川御世の　えゝ世助出えれい　度はあやれこりやねー　あゝいのーをえーえ

若歌あゝいまあゝあゝ　つゝのえ世　よはりそはり

やあえれんやあら　枝もおのえこれ　栄あはいえれえ

ゝてれえれえいよおゝおゝ　葉もこのこのえ世　繁はれ

いしやあえゝおよおよおこけまうちよはけ

れりしやのなたあねれえゝのはこはこかーあゝ

ばえれでれえれえゝえゝおよ　ちよおゝけまうわ

よはおかけれそりやあのじてれこはおめ

なかのつなかられえれえよゝやあゝ祢れ

送り「はーあそーおゝりやそーえーえのーこかー

あゝいばー　拵七本　約三分二十秒

小田原木遺保存会　長唄研究会　木保本

五萬石

五萬石でも岡崎様は御城下まで舟が着く

ごはまあんどごおくうでけもはおおかあざけ
あさいいさまはわはへけえよたいこはのはおへ
さはあんせおかしろおじいたあまはでけふのうう
いふうふかはあつうくうじょんがいなはへ
へけやれこりやふうねぬのはあいつうくけうだ
らいろおじいたはまはでけふういふうかのは
あいつうくうじょんがなはえけえいよはお
いよはけはおいいいいのはいこはのはを
さあいいせけえけまだあまはだははやあそ
はの

昭和32年9月

横六本（約三分十秒）舟が着くお城下まで舟がつく

木保蹤

木保蔵

三河嶋　（中間）

御世は目出度の若松横ら枝も栄えて葉も繁る

本棒（唯男）起す

御世は目出度の夏草はあそちゝりやあやあトれこ
おれはあいれはの若松うゝゝえゝいえトえゝの横ら
ちゝえゝいえトちいさちおいさちトなの枝も栄
の えてはあそおいりやあやあトれこはおれわあ
いゝ 祢はのいちの葉もおゝえいいえトえゝの繁る
いえいえトちゝさちおいさちなはの

椿八本　（約三分三十秒）

峯の小松にしなゝるあけて
谷の流れ下亀遊ぶ
此ちこの町かお紺の宅は
油しめぎの音がする

鎌倉

鎌倉の御所の祝に庄屋さんの娘が酌に出た
酌に出たなら看よりも酒よりも
庄屋さんの娘が目についた

本持より起す

鎌倉のなあいゝこしなあかあかしよのなあ、あこれよはほはいせこはえ御所のお祝みにの庄屋さんあこんみお～庄屋さんのやあれこりやしやあああいこしやちくこうにいこれたの八酌に出たなあらなあいゝおなあこゝゝゝのなあこあこよーほはいせはえはえ者よりもこれわ酒よりも庄屋さんのお娘がのめはえいゝ物めはえトえトにいゝ付いこたの

本持より起す

庄屋さんの娘が目についた

（約三分四十秒）

昭和壱十壱年九月

水保睦

水保瞳

布目

向ふ小山に光るは何ら

はあん向ふえは小山に光るは何ら布目小萬のぬりがん笠よ

りやあるもあれ布目えはぬりがん笠は

笠は物あれなりやはもりやあこれ布目えはぬりがん笠よ

えもはぬりがん笠よはあれおいりやはもとおこ

とおもおいこいとおふかあいさあいかあかさあ

とあもの

○向ふ小山に光るは何ら布目小方のぬりがん笠

よ　ぬりがん笠ら布目小方のぬりがん笠よ

○布目小方のぬり笠なれは

一夜かりとっぷも主さん共に

梓八本（約三分四厘）

遠鐘

遠鐘の花ェ門がせせらぐが鳴く
とわへこいが　何ぞ云うて鳴く妻にことわ恋しぞ

平時より起す
[illegible]

遠鐘のおなかわあ　はあ　あ　ん　えんえんは　そはおメ　あの
なぞ人下はえも　おせえは　こおれわはお花ェ門か　おこの
はおこいせ　おなかあ　おんは　あ　ん　えんは　そおこ
なのあ　ん　下はえもおせえは　こおれわはお花ェ門か　おこ
のしおこいせ　おこおせ　えーうやあー　のなは
あいはあんえは　えいえは　ほ少おんえは　はあい
いいえは　はあやれこりや祈の

六本　三分三十秒

若竹改

昭和参拾貳年九月

軽井澤（平周）

昭和参拾貳年九月

輕井澤

（平角）

輕井澤ゝわ何処のしゅう水ゃ云ひ初め処
一夜泊りの其のかゞ心ひかれる輕井澤

おゝい輕井澤に、ひゝたりゝとおゝさ水れ
の谷川沢はあゝ川こりゝ水ゃ少おゝ心はし恃し
おりゝのゝあ川ゝおごかのおゝ志とあ水ゃの云か
こゝえゝ初め処はゝゝあ川ゝおゝ川ゝわゝはあの
夜このし泊り志いお以のお方遠のゝし心をえひ
志かあ水ゃ輕えのし井沢はあゝゝゝゝはゝあゝ川
こりゝ水ゃのえゝし心をゞゝゝゝゝ輕井沢はあゝ
あ川ひゝお、川ひゝわゝはあのし夜このし泊り志
おこゝゝ其方えの見心をこゝゝゝゝ輕井沢はあ
ゝゝゝゝはあゝ川こりゝ谷川のおりゝゝゝ志ゝ

わしかやあいいりこいいまかたこいどおくは
ちいいこいかあいいはの
葉（なぎえ）十三本（約七分）

何処のようはかこい初めた一夜泊り志其の方
はかこいかれる軽井澤
心をひかれる軽井澤
一夜泊り志其の方が心ひかれる軽井沢

花も色々ほゝえん志やくやく百合の花桔梗
やまやゝな下志こゝはり咲いゝはやゝ藤の花

昭和三十二年九月

ぶんしらめ

箱根八里は馬でも越すが
越すに越されぬ大井川

[illegible]しち　あけえどおおんしちしおめー
えーまやーせーえーろーぶかあーれこはおれわはあ
いはのおーいーいー箱おーおーおーおーー根ーえーえー
えーーえーーえーえーーえーーー

いしえはえはえは

野曾兒

けにやはやしや見身成る
さいこえたゝたらのひようしにて
皆ハきく集まりて
童に調子や見身なる
じん少わや少ろり少ろり
少わり少ろり少ろり少つゝ成らは

ちはおいゝおゝハえはいえトえいえハやはあ
ゝゝ成えはいゝゝゝゝゝゝゝゝやあ少ちをかこはさかト
てはわはこふやちゝさはこハかゝやさはのも
かゝゝゝうけはわはあちおゝゝ心ハはおゝゝゝゝ
ゝはハ少かゝゝゝなはたはもはねはゝでくけ
ろはなかあらはもはへえはたわはみゝゝまあはし

とうはのおいなはあとちおいねえはやはあれ
はなあとなあいいとはかいいのやはあいい
はこはわはんこういえおとこいえまおしや
うえのはちはいいさはえはえちいいやあはは
えいいいはやおいのいえはやしえはい見
事なるのうかはうしちおいねえはやあはなはい
あとちおいいいのやあはとこははわは
はんこはいいえおとこいえまおしやうえはのち
はいいさはえはいちいやはあいはれ
いさいこくのおいいはいいあらあいらあ
のしえいいはいうおいしいいにしいにのし
てしえいいちおいねえしやあはしなしいあし
ちしおいいいのやあはしこしはしわしはんこ
しいいえおしこいえしおしやいえしの

昭和九二年九月

木保睦

ふーいっさーえーい、ふいやーあいれ

はあ

んしんさろーあいやあれこりやねの

さろー

おりりやあいれこりおれわいねあ

んさお

ろおりりやあれこりやねの

はあ

いれこれわいねえ

さろはおりりやあ

はおまさおはりいといさえれ

おろぼいとおの

あはらはあのあっぱはあはらおいねえはやあれ

なはあなあっあいれらはいいいのやはあれこ

はれはわはあいはんこはいいれおはおこいえ

しこおしやうーえのはふはおいいさあいえれ

ふいやあトね

棒　場合によって違うので不明（時間　上同ジ分）

小田原木遣保存会　木保睦

昭和九二年九月

野曾木送り

そんならやけ茶を送りませう

そんなら見に返しませう

おかめ山の柿なあらかあ、のあらかあ、わ送りまあいしら
おかめさん、おかめ、えいえいこの宮つこおめ
山なにがさあいてなさあめんやあいこれそお
こじやこのえいんやあいこらえんやらおかさ
のをめせええいえいえいえのはあいれえいわあ
さあこのをこいこいんやあいあこらあのいせえ
いいえいえいいえいいはあいれえいえわ
あのさあこのおいいえいえいはれあはは
あれかさあいのおいのこおれえわあいらいやいや
さあのせえいえいえんやこれわあ

昭和弐年九月　棒七本（約四分）　木保睦

八坪志茅

（中間）

やあ、志ちめえやあ、志ちめえまかちえちゃやあ、ル
ル、こおルわあ、ト、ル志いめえ、奴あト男いえ
、ええ、ええ、かたえ、えいやあ、こルたこルあ、こたち人
こおのさんこのルは◎さあ、志いめえ、ヤ奴あ、男
い、、やあ、あ、ルさルあ、こえ、◎でくうろ
お、、なやあ、ちもお、（以下野賀氏ぶし）

奉四年（約壱分五十五秒）

えっちたのみやあ、しよお、トおいたあ、よお

昭和四五年九月吉日

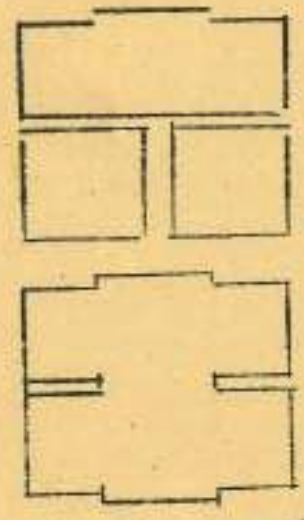
小田原木遺保存会

木保睦

おいいさん　こお　このおいの　おいいふしやあいま
こおとおにいいさん　みごおいとえ　えいえ　えの　え、
えんやあいいらあいは　ルわさあいのおいはおおおやや
あいの　おおいさあいいこわあいいございらあういえいえ
いんやあいいいらあのえいいえいえいえいえさ
あいいらおいこいいいいのまあいいあいいもおい
やあいおいらめやあおいらめやおおいらめな

棒六本（約二分二十秒）

昭和五年九月



小扇來瀧登

木保睦

御せは目出度の若松様と枝も栄えて葉も繁る

御せいかあよいこと
えいえいえいえ
ト目出度のやあ
ト松の様とおいな
やあそれおいそおいおじやあ
やーあれ枝はあいもやあ
あいやあれこれわあいや
えてやあいれこれわはこれわ
いや繁るあいれこれはわあ
ちはあげえいちはとはおい
えのえはとおほいせえはやあれ
いらあいこのせのいこと

小車（中間）

目出度
えこれわ
あれこれわ
あこれわ若
なえトんやあれこれ
ちあいれ
これわ
前えいえ
えいえ
ーの栄
ちはお
えのいとト
しりえトト
あれ
えれえやあ
そおれえやあ
えは見いえ

やあ　あら　えは　やは　らん　とい　さあ　とお
さは　あや　あれ　これ　われ　はの　やれ　これ　えわ　はは　れえ
いメ　はは　あト　えい　えい　えい　えと　いさ　やあ　れこ　りや
称の

小車返し　　拝拾弐年（約六分四拾抄）

えは　さり　いさ　おい　ては　はは　はは　えさ　やあ　あれ　れは
これ　われ　はの　あい　しあ　えい　ちあ　おけ　えお　わは　とは　はは
おい　いや　あト　れえ　はえ　のは　とお　ちは　えい　えや　あは
れは　とお　いさ　はと　れこ　れわ　はの　はや　れこ　れわ　はあ　れあ
れえ　わは　あえ　いメ　れは　えメ　とい　さは　やあ　れこ　りや
称の

拝四本

（約貳分）

昭和廿拾貳年九月

小田原本道保存会

若干改め

本保證

六平　吉郎
代官町　賀之
鈴耳　貫次
幸田　秀
浜口　鳴美

しんまつ　ちゃ　ちゃ　ちゃ

川こりやなのしあり通るいわあいいい

昭和参拾貳年九月吉日

黒鐘（中間）

小田原木遺保存会　木保睦　推　木
和田
榎澤

咲いた様に何故駒つなぐ駒が鳴わば花が散る
花が散りても又来る春には芽を出す

元唄　ちはおほおいぢおこへは　はちほいぢこはは
はえいそおはれがあいえ　えはわはあいれ
はえいえいわあしいえはしめはえはろしいめ
うはやはあれえいえはえ　はえおほおいぢ
おこはちほいぢこはは　えいはえいいえ
いえいおいいいくちおこがはは　のおいへいえこいはれわあんなはあやあい
さあいやぢはやあせいえはえやはきぢおぜえ
はあれわあんりやあおいはくろおいがあ
あいいはは　はえはやはぢはぢりやあ
元いこい

やまあとでもおぼえた。ほの
とうほおいしこはおぼえた
ほえのいはわはあいれえ
えとうしいあうはおやあれ
おいしこははうほほいしこ

ほはほおいしこ
はそはおとれあいえ
はえいわあはしめ
えとえいえの
はほ

いえいいえいいとおのいいはれわあなはあ
いやのあいいさあいやはれいはあ
やあいきいしせはあれわありやあいのいさあ
さあいいいいたはいえいいさあ
ぐうーりやあいさくうらあにはえいのな
えいこおへなせこおまうなあさぐうおいさ
いなあのいこをいまあいはいえいえいい
いさあいいあえぼあいのなあいいなあいい

黒鐘

あういなあうわあなうわあたおいりはお
りゆあいのえいいいとお花えいあ散るり
おいいいはせのはえ花がちいてえもおえ
いいいさあちおいさはのはえ又来る春にわあ
おいいいあ芽を出すけういおいいせのはえいゆ
あいはいおいいはえこしいいふりいそおい
でえわい二度咲くまいさのあちおほいいおい
こははいほいいこお孫えいえいはおいははわ
あいえいいえのはわはあいはえいいいえ
いいわはえいえいえいしおいえいわいしいわい
えいいいはいはいあれえいいはおいほおいいとお
こはあちはほいいこはは孫はは

明治三十三年九月

棒廿一本　約十一分

木保睦

又　心

港〳〵に着く宝船　波に黄金の花が咲く
本持ち上げ

ゆかいあいあいあ、あいあ、あ、あいあ、あ、あ、あ

つ川下り小船港下茶舟　汴下大船帆かけ舟
昭和二年九月　舞五本　（約二分四拾秒）　木保睦

咲いた櫻に何故駒つなぐ　駒が勇めば花が散る

前幕より出て前幕下終る（田歌劇より入る）

見得えー劇

あおいとこ　ちいとこ　ちいとこ　ち

なあ、あ、あ、ぐう琴を、琴をこでまあ、たあ、の
え、い、しいらいでえ、しらを、琴を、こじゃあいら
わ、あ、あ、の、なあ、あ、あ、駒、あ、あ、あ、あ、
あ、の、え、え、えやあ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、え、え、え、
ら、を、い、さ、ら、を、さ、は、の、い、さ、あ、こ、ま、ほ、れ、
り、や、あ、は、え、ぼ、あ、れ、こ、り、な、の、を、そ、れ、こ、
れ、わ、あ、は、あ、あ、な、あ、れ、あ、が、あ、の、わ、を、
る、う、ら、え、え、え、え、さ、ん、や、あ、れ、せ、え、え、
い、の、即、を、い、也、を、を、わ、あ、な、ん、ぼ、な、あ、ん、ぼ、な
あ、ん、ぼ、を、を、の、め、え、て、そ、を、そ、こ、で、え、ま、あ
た、あ、の、ら、こ、え、し、ら、て、え、い、え、え、し、よ
を、を、を、の、え、え、し、ら、て、え、え、ん、し、ら、お

拝　武治本

（約拾分）

昭二年九月

木保睦

泡田

泡田出る時や流下出たあ
今は泡田の風もいや

[上の共お[illegible]]
[水者]やあ小さあこあいこ田ゑ、出えいる
いう、こうこ出こ来[illegible]
いいいいいこ[illegible]
匂あいあいあ[illegible]
匂あいこいこやあいい小[illegible]さあいあ[illegible]
匂あいこのおこいこえこえ[illegible]志[illegible]
おこいやあこおいおさあいさあいこ[illegible]さあ
おせこいこえいやせもおいやあ志あこい水えこ[illegible]

ゆやべかいっぱいこおりかおやぶれいっぱいまあいっ◎ホ
あいさあやあたあいこのかおいおいいんぞんぶんお
いやあぞもおこぶやあまあ面白おいいいいさあこあたいい
ちおぶさんさかおいせえいいいい◎

棒十一本（約五分四十秒）

○そうたくちゃ出銅張小性
おりて出撥ぶりなほそろ紋

○此処は何処ぞ広子長三間へは
此処は信濃の伊那道

○出銅の羽黒ぶり鐘ぶりて
ぶいてすなせおそ千里ひぐく

昭和九年九月十三日　木保陸

昭和九年九月吉日　　木俣陸

田うな　（中面）

あがせちらは我が田とあらせ君が田と

（綱締）棒が綱締より出て綱締下止る

田歌劇

おいこいらあいあいでえい◎志めえいろいいやあれいえいまやあ
せえいえいてえい◎えりけえいいろはいどっこ
いいやいおいいじやあいわあえいメ◎志やわ
志やわなあんとおい志如あいとおいねえい

君いいいい

木遣係係今　木係證

日光　（中間）

御世は目出度の若松様の
枝も栄えて葉も繁る

ヘー刺ヶ入る

御かいせおいいわえいいお目出度あいのおい
ハは◎目えいいえいえいえいいえ度あいのおいあいお
いいいやあの◎いいいいいえいえいえ

あいまえいいんやあいあれせえいえいの葉あ
いあいもやあいれしいいげえいるういの葉もしげ
ちえいえの以上おいの葉もおいしげるいちおいは
えいいえいいえいえいえの志めちおいえ
えいいまあかあいいの志上おまかおの志おいちおは
以下峯小松にしなづるかけて流れ下
棒捨本四分二十秒
亀遊ふ(碑節と)

△今度御産らは持って来てたもれ
伊豆の御山のなぎの茶也

昭和九年九月吉日

若聖改め
木保藤

昭和壱拾壱年九月吉日

発行　小田原木遺保存会

若干改め　木保睦

著者　熊澤賢次
　　楊井賀之

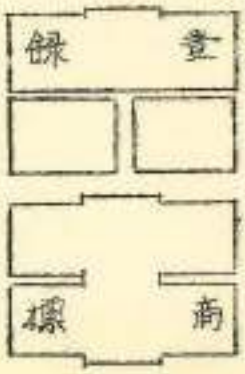
印刷　和田吉郎
　　遠藤晴美
　　永井守次
　　柏木秀夫

責任者

きせり集　改訂版

非売品

木保睦の許可無くして複写を禁ず



火手 吉郎

浜口 時美

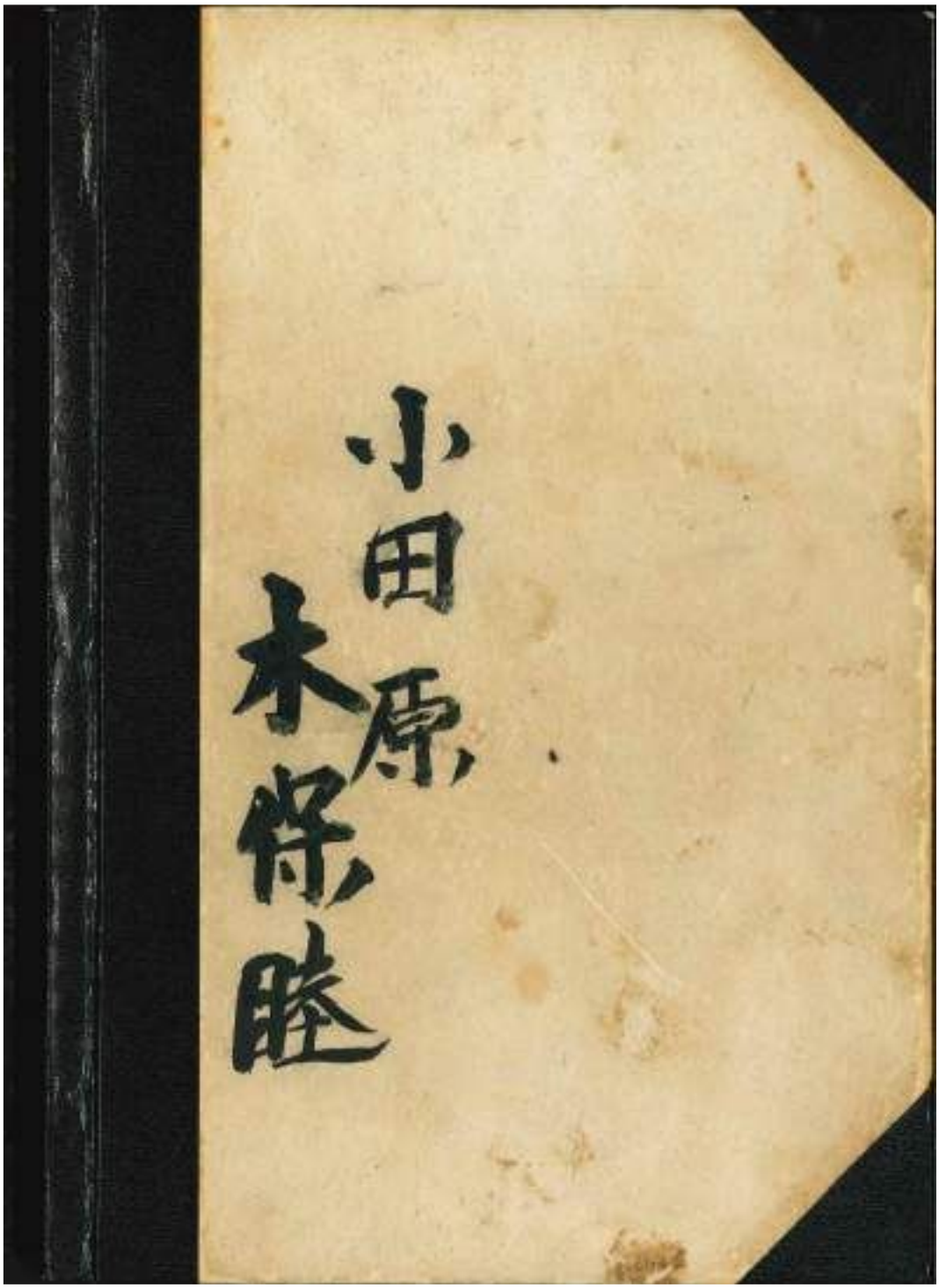
代官町 加賀之

鍋町 賢次

御番所 守次

駅前 秀乃

②『きやり集』、発行小田原木保睦、昭和四〇年頃（手書き）



登録商標

寶

踏まれても根強く忍のべ道芝も　やがて花咲く春は来るらん

（故　馬越恭平翁日々）

過去を返り見て
慨歎すべからず

将来を思ふて
失望する勿れ

タカラ帳簿

◎倒されし竹はいつしかのび上り、倒せし雪は消あてなくなる

「手古」て　こ
よおいやあ、れーて、こおーせーえ、えー
えいえ、、、ほおい、いやあーれ。ーえ、、を
ら、ばあーやあ、、いるーうはえ、いやー
あ、らーよーおよーおー。よーおー、いこーあー
せーえ、、、ーよおいやーよおうーやーあー
あれー。よーはーあーりーおりやあやれーこり
やれえーしいらあーべーえーやあ、れーえ。し
めーえ、ろやあーれーえ、、、えー、、やあ
あらよーおよ。ーおー、ほーいせーえ、、

ペン毛筆両用紙

タカラ帳簿　十三号

40	39	36	32	30	26	18	16	4	1
軽井澤。	小車返し。	小車。	布目。	五尺。	鎌倉。	野曾克	三河島。	駅路。	挺(手古)子
80	76	72	70	66	62	54	50	46	44
港。	洒田。	真掛塚。	野曾克送り。	どん志よ目	山敬の不寄	黒鐘。	凍鐘。	五万石。	様々花。
			112	106	102	100	94	88	82
			絵師返し	清危寺。	松坂。	八津志よ目。	日光。	高志。	田歌。

いやあ、れーえよおいーさあやあ、れこれ
わーやーれこれわーあそーおれーえはあー
えいえ、よいきやあれこりやね○

一、祖よ しめわーあよいそー
二、たのみーまあこすー
三、ごくろーおながらー
四、りょがいーながらー
五、さりとーおこわー
六、あとしーときしー
七、やーあれーこーれわー
八、もーしとうーもー
九、あこーおぎーなあがらー
十、じょーさいーなくーばー
十一、めえこでーたーくー
十二、こーいこおかーけーろー
十三、すこでたのみまーすー
十四、こいおかけろ
十五、こええおしよ
十六、やれなかつながら
十七、どなたもたのみます
十八、ただにぎやかに
十九、そよがいちどに
二十、りょがいながらも

ペン・毛筆両用紙
タカラ帳簿 十三号

駅路

鹿嶋立し丁其の日本橋
橋をふり出す品川 枕
色の品川情のさめず
えこがの降りそな鈴ヶ森
鈴ヶ森からおつぐら馬 枕
引い丁大森和中散
君は大森見事にかざる
諸国みやげの鶴 細工

ペン毛筆両用紙 タカラ倶楽部 十二号

走能参四五六郷の渡し
流れ渡り丁川崎 枕
文の川崎やる神奈川よ
思う雑ヶ谷戸塚宿
戸塚泊りじやまだ日も高い
駒を早め丁藤沢へ
昨夜藤沢 枕 平塚 枕
路は大磯小磯がし
虎を見たさに大磯かけ丁
行きつもどりつ七もどり

りんき淵いが大磯の虎よ

曽我の十郎の身をやつす

たゞひ梅沢酒匂を越えて

諸国名代の外郎店

暮れて小田原燈灯つけて

明日は箱根を馬で越す

箱根山にも名所が虎ゑる

曽我の五郎の守神

箱根峠の八幡を越えて

曽我の五郎の力石

ペン毛筆両用紙

伊豆へ廻れば名所はあれど

それはもどりの三島道

私しや三島の明神様へ

酒は沼津と願掛けた

原と吉原自酒名所

飲んでかん原由比沖津

飲んでかん原由比氣げんで

沖津ころびつ千鳥足

由比の口説が我しやしやくの種

明日けの鐘までつゞく沖津

江尻もじりとからんだ縁が
未だは府中で夢うつゝ
江尻府中は手でつくまりこ
ならば岡部の蕨枝よ
岡部見てさえ花美しや
咲いて折りたや蕨枝を
島田くずしてうかくまよひ
私しや首たけ大井川
大井川から急いで来たが
とても馬たけ金谷宿

ペン・毛筆・同用紙

島田金谷のはたごや娘
えがほ日坂のわらび餅
思ひ掛川文取り落し
ちらと袋井見付宿
天滝渡りて川岸見れば
松が見えます浜松が
私しや遠洲浜松育ち
米の成る木は私しや知らぬ
遠洲浜松根皇とすれば
磯のゝ波がゆりおこす

遠州浜松舞坂おどり

顔を荒井の平すがよ
荒井がみなら油氣なしに
わらで丈たば引結び髪
白須賀しゝ氣ぐすめらしい
主は二川二心
我が娘は名も二川よ
顔も器量も吉田宿
二川しやんすなうたぐり深い
さ程いやなら吉田宿

吉田通れば二階でまねく
しかも鹿の子の振袖よ
むだな時由けん赤坂駅よ
はこぶ芽川やぼな宿
三味の手ほどき岡崎女郎衆
ちりゆふなる身で面白い
ちりゆふ朝立ち笠寺越えて
なる身なわで袖しぼる
なる身ならめ身目かどで知れる
晴れて乗りだや宮の舟

ペン毛筆両用紙
タカラ帳簿 十三分

宮は晝毋桑名は夜毋

客は居つゞけ四日市

伊勢へ歸れば名所は有れど

其れはもどりの藥師

石藥師じやと云ふた娘

庄野の亀山早せき上ぼる

きりと宿どりは坂の下

坂の下なら一夜もいやよ

朝の目ざめた鹿の声

雨も降らずに鈴鹿の社

あいの土山雨が降る

水に車でだまされとしても

石部金吉金かぶと

ほしが赤けりや草津と云ふが

私しゃ大津で暮したい

たびのつかれは京九重に

咲いて都は花盛り

五拾餘次つゞなく終

明日の歸りは中仙道

ペン・毛筆兼用紙
タカラ帳簿 十三号

やれ鹿島えいえーえいえーえいえーえ

三河島

御世は目出度の若松様よ
枝も栄えて葉も繁る
峯の小松たしなるかけて
谷の流れでいよ亀遊ぶ
此處の此処か此処か町かお紺の屯は
油らめぎの音がする

本枠より起す

御世は目出度の若松様よ
こおれわあいねー○若松ういええいえーえる○
枝も栄えて葉もこりやあやあーれこー
おれわあいねー○いよ美もおいえいえーえる○
繁るえいえいえーよいさよおいさよなー○

枠　八本

ペン毛筆両用紙
タカラ帳簿　十三号

野曾垣

（唄）げたやはやしが見事成る

さいこくたこうのひようしに

（前唄）皆れきくが集りて

賈た調子が見事成る

（唄）しんとろやとろりとろり

（元）とろりとろりとろりとつく成らば

松に成りたや有馬の松たつた

巻かれて御座る

梅の匂ひを桜に持たせ

花を柳に咲せたい

梅はにほひよ桜は花よ

人は見目よりたゞ心

えしに黒鐘車に乗せて

てこで引出す御城内

花は上野か柳は銀座

月は隅田の屋形舟

花は上野かもみじは染井

松は根岸のおぎの松

ペン毛筆両用紙

花はみよしたもみじは立田
松は唐崎一つ松
花になるなら山吹はよしやれ
花はよけれど實は成ぬ
色で身を賣るすいかでさえも
中たや苦汐の種がある
松は唐崎そてつは堺
みかん紀の国栗丹羽
さても見事な小田原つゝじ
元は箱根の山育ち

ペン・毛筆両用紙

娘したがる親達までも
させて見たがる針仕事
駒にふまれし道芝さえも
露に一夜の宿を貸す
風にもまれし唐竹さえも
小鳥に一夜の宿を貸す
さてもめずらし八丈が島
根からはえたか浮島か
水に流れし浮草さえも
ほたるに一夜の宿を貸す

タカラ帳簿 十三号

よーおーおーれれーれーれーれーれーれーやーあーーーれー
れーーーやあとをおーこーとおーてーはーれーれーやー
あーさーこれはいやさーのせおーーーうけーはーあ
よおーいぞーおーーーやーれーどおーーとなーたー
もーねーごくーろーながあらーもーれーたのーえーい
まあーしゃうーおーいなーあーよおいねれーやーあ
れーなーーなあーーーよーよーーやーあーーれ
これーわーはんこういれおーこーいれーおーしゃうれー
よーいーさーれーれよーいーやあーれれーーーげーたや

ペン毛筆両用紙

おーーれはやしがれーー見事なるーうーうーよ
おいねれーやあれーなーーあーよーおーーーや
あれーこーれーわーはんこーいれーおーこーいれーお
しゃうれーよーいーさーれーーれーーよーいやーあれー
はーあんしんとろーやーあーやあれこりゃねとろーおりー
やあれこーおれはーいねはーあんとおろおりーやあれこりゃね
とろーおりーやあれこーれはーいねれーれとおろおり
いーいおーーおれとおーりいーいーいとれーーーくーうーな
あーらーあーあばーあーよおいねれーやあれーなーあな
あーあーよーーーやーあれこーれーはーあーはーん

タカラ帳簿 十三号

こーいえおーおこいえーえおしゃうーえ○ー
よーおいさあえーよいやあーね

ペン毛筆両用紙
タカラ帳簿 十二号

鎌倉

○鎌倉の御所の祝ひに
庄屋さんの娘が酌に出た
酌に出たなら看よりも酒よりも
庄屋さんの娘が目に付いた
○目にも付いたなら連て行かんせ
何處までも女はかしやうの縁じゃの
縁じゃものじゃとたとへ野の末山の中
どんな心苦もいとやせぬ

○舟の船頭衆は何着て居やる
とばを敷寝にかゞ枕
いかりて下して反綱下げて
月星を眺めて夜を明す
○拍七が初にしのんで鳴子(ゴ)の
小鳥で日が暮れた
日が暮たなら鳥を枕にらんかん影に
月星ながめて夜を明す

ペン毛筆兼用紙 タカラ帳簿 十三号

○浅水御寺の浅五坊様は
やぶれ法衣にいよやぶれ笠
それも誰ゆえあの姫何時か一度は目ぐり
逢ずにいよ置物か情しらずの姫
○相模横山照丁の姫は書のためと
あの車引く
それも誰ゆえいよ小栗殿くみし浅水姿を窶し前掛
たすきも取ぬま無それも誰ゆえ小栗殿

本橋より起す
餅屋のなあ、こーなあ、○なあ、あ、よーほーいせえー
え御所の祝ひに○庄屋さんあんのお庄屋さんのやあれ
こりゃね庄屋さんの娘が○しゃめあ、、しゃくーたい、
出た○酌に出たならなあ、、、なあ、、○
なあ、あ、よーほーいせーえ有よりも○これは
酒よりも庄屋さんの娘が○めーえ、、えめーえ
えーえにーい、付いた○

拝八木

五尺

五尺手拭よく染めた
染めも染たよ仲よく染めた
染めてくやしやにせ紫を
元の白地にして返せ
梅の下だはうの身が
小ぶなくわえてびくしゃくと
御世は目出度の若松様よ
枝も栄えて葉も繁る

やれ五尺えゝまだまだね○やれ五尺おー手
拭りゃどっこいこれはいね○やーあれこーおの
おはーありおりやさいこおのーはあゝにいわー○
やうれー寄よくやれ染めた○そおゝこれーえい
かゝあいえーはあいゝやはあやれこりゃね○

拵五千

ペン毛筆両用紙
タカラ帳簿 十二号

布目

向ひ小山に光るは何よ
布目小萬のぬりがん笠よ
布目小萬のぬり笠なれば
一夜かりまともさん共に
笠を忘れて峠の茶屋に
空がくもりていよ思ひ出す
向ふ通るは清十郎じゃ無か
笠がよう似たすげ笠が

ペン毛筆両用紙

笠がよう似て清十郎なれば
御伊勢参りは皆清十郎
神田鍛冶町に鍛冶屋はあれど
君の召すような太刀が無い
鐘をたゝいて長者に成れば
神田鍛冶町は皆長者
加賀の加賀町に笠屋は有ど
君の召すような笠が無い

タカラ帳面 十三号

はあん向ひえー小山たえ○ー光るは何によ
はあヤりやあや○あ水布目えー小萬の○えー
ぬりがん笠よはーあヤおりやー○いかあにい
もぬりがん笠よはーあヤりや○あ、れ布目
えー小萬のえ○ーぬりがん笠よはあヤおゝ
りやー○よおゝいよあよいよおいかあさあゝ
あかあがさあよー○

稈八本

向ひ小山に光るは何よ
布目小萬のぬりがん笠よ
ぬりがん笠よ
布目小方のぬりがん笠よ

ペン 毛筆 両用紙
タカラ原簿 十三号

小車

御世は目出度の若松様よ
枝も栄えて葉も繁る

峯の小松たしなめ鶴掛て
谷の流で亀遊ぶ

朝の野に出て若菜を摘ば
露で小妻が皆濡る

小棲濡てもこまで濡ぬ
妻と定まれば皆濡る

御世はあーい、えーえやあ、れこれわいね。目出
度えいえいえー目出度のやあれこれわあ。これ
わ若えーよおい松。称よおお、いなえーんやあ
れこりゃあそーお。いそおーおぢゃあそおじゃあ
よいねやーあれ枝はーあ、こもやあ、れど。こいこ
れわあやあ、れこおれわあいね栄えいえいえ。
えー栄えてやあ、れこれわこれわ葉もおえ。
よーおい繁るやあ、ル、これーわーあ、ー。しめ
えーろかーあけえ、ろーよーよおい、、やあーあれえ
え。えーよおほいせえーやあれ、そおれえわやあ、

ペン 毛筆 両用紙
タカラ帳簿 十三号

いら、あ、の せ○い、よーおお、、、ぇーぇいぇいやー
ああ、ら○ぇーやはらんよおいさあ、よおいさー
あやあれこれわー○やれこれぇわやーおんれ
ぇ、、わあーぇ、ぇいぇ、、ぇよいさやーあれこり
やね○

拝拍参千

ペン毛筆両用紙

小車返し

ぇーさりいとおーぇーわーぇいやあ、あれー
これわーあ○あ、しめぇ、ろかあけぇ、ろー
よーよおー、、やあーれぇーぇ○ーよおーほい
せぇーやあれーよおいさーやれこれわ○ーやれ
これわーあやれぇわーあぇ、、ぇ、、ぇーよ
いさーやあれこりやね○

拝四本

タカラ帳簿 十三号

輕井沢

何處のしょう水が云ひ初めた一夜泊りの
其の方が心をしかれる輕井沢

花も色々
牡丹、芍薬、百合の花、桔梗、刈萱、撫子、
ちらりと咲いたが藤の花

島も色々
三宅八丈に佐渡が島伊豆で大島江之島
お江戸で名高き向島

山も色々
妙義、榛名に富士の山加賀で立山白山
越後で名を得し彌彦山

ペン 毛筆 両用紙

滝も色々
華厳霧降裏見滝美濃で養老布引
紀州で湯の滝那知の滝

酒も色々
扱見諸白男山君の召すのは菊酒
我等の飲むのは茶腕酒

舟も色々
孔雀鳳凰安宅丸よ川で川市吉野
吉原通ひのちょきの舟

あのや姉さんちと又御意見申しませう
髪を島田に結ぶより忠の島田にしやんと持て

タカラ便箋 十三号

おいい輕井ゑーそおりやよおいさよおいされ。
やれ沢はあやれこりやね。とおいはーそーお
りや。あれどこのおいしようねが。云えいえーわ
あたはーやあれそおいれはーはあ。一夜ゑ。一泊
りしおいそ其の方ゑ。一心をひかれる輕井沢ゑ
いやはーあやれこりやね。えいー心をひかれる輕
井沢はあやあれーそおいれわーは。一夜ゑ。一泊
りしおいい其の方ゑ。一心をひかれる。輕井沢
はあいいやーはあやれこりやね。おーいそおぢや
わーあやあいれーゑいまかせえろやーあい

れこれわあいね。　枠　十四本

何處のしようねが云ひ初めた一夜泊りし
其の方が心をひかれる輕井沢
心をひかれる輕井沢一夜泊りし
其の方が心をひかれる輕井沢

ペン毛筆両用紙　タカラ帳簿　十三号

蝶々花

御世は目出度の若松様よ
枝も栄えて葉も繁る

峯の小松に雛鶴掛て
谷の流で亀遊ぶ

沖に見ゆるは大里船よ
丸たこづちの白帆が見ゆる

本舞より起す
ペン毛筆両用紙

こかーあいげー沖あやれこりゃねーえやあ、、、
れ御世は。えーえー目出えーい度はあやれこりゃねー
え若あいまあ、あいつえ。ーの一おえ
あえーんやあら枝もえ。ー栄あーいえーええーー
えーえいよおい葉もーえ。ー繁るはーそりゃあ
え、ちよちよおけまうちよーけーそりゃなたあ
ねーえ、、のーこーこかーあいげえーでーえーえ
え、ちよちよおけまうちょーお、けーそりゃーあ。
しーこーおあなーかのつなからーえーえよいやーあ
あねーはーあそりおりゃあーえーえ。ーこかー
あいげー

桝七本

五萬石

五萬石でも岡崎様は
お城下まで舟がつく

沖に見ゆるは大黒舟よ
丸にこづちの帆が見ゆる

沖に見ゆるは丸屋の舟よ
丸に屋の印の帆が見ゆる

加賀の加賀町に笠屋は有れど
君の召すような笠が無い

神田鍛冶町に鍛冶屋は有れど
君の召すような太刀が無い

さても見事な小田原つゝぢ
元は箱根の山育ち

ペン毛筆両用紙
タカラ図書 十三号

ごーまんーごーくーうでーもーおーおかあごーあ
きーいさまーわー。えーえよおいこーのーおさー
あんせ おーしろーしたあまーでーふーうーふう
ふねがーあーつーくーうーしょんがいなーえーやれこりゃふ
うねが。ーあーつーくーうおしろーしーたーまーで
えふーうーふーうねが。ーあーつーくーうーしょんがい
なーえーえーよーおーよーよおーーーい。ーよー
いこーのーおさあーんせーえーまだあまーだーは
ーやあそー。

椿六年

五万石でも開城お城下まで
舟が着く舟がつく
お城下までしー舟がつく

ペン毛筆両用紙
タカラ組帳 十三ゲ

東鐘

東鐘の花工門が世どでうが鳴く

何とそうて泣く妻たこそめ恋ごと

次も東鐘の花工門が門のほりものは

菊水桐な波た千鳥よ

拾七が形の下でけたを織る

しの木が折れてくだが迴らぬ

拾七が紅かねつけた夢を見た

目をあて見れば元の月よ

ペン毛筆両用紙　タカラ根帝　十二号

拾七が板屋の屋根へ轉げ来て

誰が月さます君が月さます

拾七が舟のみよしに立姿

水たうつこて見たりけり

浅草の出茶屋の娘花かもみじか

花なれば枝はしや宵のみやげた

六十六部がみかさにまけておいも

しやく狂と水晶のじゅずもかたた聚て

本時より記

年鐘のなーあはあんえ
でーえもーせえー
どでなあーはあんえ
ーえもせえーこれわー
おでえーうがあー鳴
はーおんえーはあい、
枠六本

えーやーおうやあ。なん
これわーあ茂工門がお。ーおいせ
えーやおうやゃなーんで
茂工門がお。ーおいせどでせど
はあんえーえーえいえーえ
はあやれこりゃね。

年鐘の茂工門がせどで
茂工門がせどでうが鳴く
何と云うてなく茂工門が妻の
茂工門が妻のうわ恋しと
次と年鐘の茂工門の
茂工門が門の
門のほりもの
菊水桐に
菊水桐に波たつ鳥

ペン・毛筆・両用紙
タカラ帳簿 十三号

里 鐘

品川沖にも名所が御座る七つ八つ山浮洲の森よ
沖じゃ網を引く釣りの舟
茶屋の二階じゃ三上り端唄の三味を引く
宿じゃ若い衆が客の袖を引く
高輪中ぎへ八町半が身を引くこと
隅田川にも名所が御座るに權現二に拝 弘山
三に三廻り四に百しげよ
梅若塚には二つ並べし枕橋 土手の傳に行やの渡し
波にゆられし都鳥かいと

近江の湖水に名所が御座る辻堂の唐橋矢ばせの渡し
せゞの城にはれ石山寺よ
比良の墓雪に堅田の落雁一つ松
三井寺の鐘のひゞきで明ける湖水と
咲いた桜にな世駒つなぐ駒が勇めば花が散る
花が散りても又来る春には芽をい出す
とめし振袖二度と咲くまいと
我が国さゝ見せたい物は昔しや谷風今達模様
ゆかしなつかし唐城野しのぶ
外に無いぞや松島はとりよ

ペン毛筆両用紙 タカラ製薄 十三号

明日は建方側建足場たぐる丸太がとれとゝ成る
上では若い衆が六尺間飛だかけや打つ
下では頭取衆がもやを出したりさ
墨もすゝりも御部屋に取られ黒もじかえ〻く紅で書く
甚兵衛ならば寒しておくれよ御部屋様
誰しも恋路は同じ事だよさ
何か不足で地を投げたなげた地にとがけ無い
もしも此の子にあたつたら何としよう
仲のよい時出来た子じゃものさ

ペン毛筆両用紙

御世は目出度の若松様よ枝も栄えて葉も繁る
月の出も近く上では鶴亀が舞遊ぶ
千代の高砂のお様とばあ様が亀にたゝむれさ
いたこ出島のまこものやにあやめ咲くとはしほらしや
あやめにゝよう以たかきつはた
沢のまこもべ引く手になびけよさ

元唄

よーおほいとおこ[illegible]ほーよほいとこーねえーえ
えそおーれわあいえーえ。はわーあ、れーえいえ
いわあーいえーしめーえーろしいめろーやーあれえ
いえーえ。ーえよおほおいとおこほーよほいと
こーねーえ、ーえしいえいえーえ。おー、ーいく
ろおーがーあねーのおいえいはーれわあん
なーああや。あー、さいやさーやあせいえーえや
あきとおせえーはあれわあんりやああ。ー
くろおーがあー、ーねーえーのおーえーえやま
そりやあやまあーでもねーえー。よーほおい

とおこほーよほおいとこーねーえーえ、そーお
おれわいえーえ。はわーあ、れえいえいわあい
ねーしめえーろしいめろーやあれえいえーえ。ー
よーほおいとおこーほーよほいとこーねー

手唄

いえ、ーえいえ、ーお。ーい品川沖にも
えーえいはあれわんなあ、や。あ、ーさーいやさ
あやあせいえーえやっきとせえーはあれわんり
やあ。、、ー品川はーあいえーえ、ー沖そ
りや沖にいもおねー。えーえ名　名所が御座

るーうおゝいなーあー なあ。ゝゝ七つーういえ
えーえーへつー 片りやー へつ山あね。ーえ 浮洲
浮洲の森よおいな。ー ゝゝ沖じゃいえーえー
え網を引くーう。ゝゝなーあゝんなーあゝゝう
なうわなーうわーあよーお ゝそーおりやあ。え
ええいいよおゝ釣釣りえゝこのーねゝちよー
いーとおせー。えー本屋の二階いーいぢやあゝえ
ええゝゝよおいさーあよーおいさーね。ーえ
二上りどーおいつうーのーお、、、、三味
を引くーうゝゝう ちよいーとおー。えーやーあれ

下では若い衆うがーあゝ客の柚を引くゝ。ー
やあれたーあゝゝかーあゝなーあーわー中郷へ
町ーお牛がー車を引くゝ。ーよーおゝゝほーお
いとおこーほーよほいとーこーおーねえーえ
えそーおゝれーわあゝえゝゝ。えはわーあ
あれーえゝゝいゝえいわーえーえゝしーめ
えゝーろーしいめーえーろーやーあれえいえ。
えよおーほいとーおこはーよーほいとこー
ねー

拝 抵六年

ペン毛筆両用紙
タカラ原簿 十三号

山椒の木しおり

てんまかそり〳〵石かいを片へて牛が引出す清鶴丸よ
秋は木の葉をかき分け行けば
鳥も通はぬ山ほとゝぎす声はすれども自に見ぬ
紀州和歌の浦にも名所が御座る　に權現二に玉津島
一に權現二に玉津島三にみよの、根上り松
四に潮浜寺　て返えぬ片男波
隅田川にも名所が御座る　に權現二に待乳山
一に權現二に待乳山三にみよ迴り
四にしらしげよ波にゆられし都鳥

長兵衛〳〵が三人ごゝる中の長兵衛がきしをうた
鐵砲かついでこわきざし差して
きじの御山にきゝし打にきゝも鳴つば打れまし
紀州御道の田んぼの辺に御立成れし御地藏様は
男が通ればあちら向いて御座る
女が通れはたこ〳〵笑ら是がまことの西地藏様

ペン毛筆兼用紙
タカラ帳簿 十二号

まかーせーろーやーやれこりやなーこれわーて
んまやれこりややれこりやなーかそくーおーろお
ーかえーえろかいをえーー。えぞえーてーえはれわん
せーえーえ午がかいえーー。えーー引き出すーうーう
うなーあ、あ、なーあ、な。あーなあーなあああう
なうーなうわなーうわよーお、そおりゃーあ。
あえーえい、よーお港鶴えーえ、えう、よーお
おちょーいーとせ。ーえしめーろーおやーあ、や
れこりゃね秋はいーえーえ。おい木の葉お、

おーおいかきはけえー。おいおい行けはあーあこ
のーお鳥りもやれこりややれこりゃな。ーあー通お
おわあ、、、ぬうーえーえ山えーえ山ほと
。えーときいーすーうはれわんせーえ、声えー
えーえ。えすれども月えーえ目えーえ目たーい。
なーあやあれ見えぬうえーえしょんがいえそおり
やあーあ。えーえいいよおこーおのーもっとーおもー
なりけるーう。えーえ、おろーお、、いかーあ、あー
よーおえーえ、こえしょの木はあーっーうーれん
しょー。

拵　拙五年

ペン毛筆両用紙　タカラ便箋　十三号

どんぢよ目

箱根入里は馬でも越すが
越すに越されぬ大井川

島田金谷のはたごやの娘
なますもろとりちょこ出した

天竜渡りていよ西見れば
松が見えます浜松が

遠州浜松廣いようで狭い
焼けくるはが二丁建ぬ

ペン 毛筆 両用紙

吉田通れば二階でまねく
しかも鹿の子の振袖よ

坂はてるく鈴鹿は雲る
あいの土山雨が降る

勢田の唐橋唐金ぎぼし
水にうつりしせゞの城

タカラ根海 十三号

ぢーおんしよめーれどーおんしよーおめーれま
かーせーれこうやーあこれこーおれはーあいれ。おり
おい箱おこおこおこ狼ーえこえいえーえーえこえ
ーよーおよーおはーおいれ。やーあれーハあこーちー
いここいー思いここはあーはれれーあこせ。
ーれこ馬あこでれーれーもーおこーおこおこ越す
にやーれこりゃな。ーこーおこすーうこうこたー
いここれーれーれーれーれーれーれ。ーおここすう
ーうにーいこれーれーれーれーれーれーれーれ。やー

あれ越えーあここここーれーれーれーれぬーう
ーうはーあれあーれせ。ーれーおえーあこ大丈いー
川あここあーわーあーあこよーおこおー。ーこえ
ーあここあーこいてーれここんなーあえーー
あーれーれ。どーおんこよおーめーれどんこよー
めどれーしよめなーはあーいこやーはあや
れこりゃれ。

拝十千

ペン毛筆両用紙 タカラ製薄 十三号

野曾垰 送り

こもろ出て見ると浅間の山に
今朝も煙が三筋立つ
其の内煙りが天にのぼりて雲と成ります
そんならかけ茶送りませう
そんなら兄に送こませう

ペン毛筆両用紙

おこいそんなあらあこで送りまあこしよを
をこそんよをこれこれどこをいなにが
さあこてなこそこんやあこれそれをこじやこれこん
やあこらこんやらよいさのをこせこれこれ
これはあこれこわあこさあこのをこれこや
あこあらあこせこれこれこれこれこ
はあここれこれここわ
これこれはれわあこはれわあこのをこいこれ
わあこよいやいやさあこのをここをれこれ
れわいね

七年

馬　掛塚

凡そ世の中で奇麗な物は宮女の袴に十二のきさき
おいらん道中藝者に仕事師

向うに見るは霞が関よ
花は無けれど桜田御門

向うに見るは聖堂の森よ
花は無けれど桜の馬場

わしに黒鐘手に乗せて
延ばすでひき出す御城内

ペン・毛筆・両用紙

黒骨ぼたんの扇をかざし
何處の祭のかへりやら

花は上野かもみじは染井
松は根岸の御儀の松

花に成なら山吹はよしやれ
花はよけれど實はならぬ

タカラ帳簿　十三号

そおんなあらあそおえこおおゝ
おゝいねいやあれえゝえゝごくろお
おながあらあゝもおたのえいまあゝ
あゝすはあそおやれあゝはあれわさん
のおそおじやよゝよおいさやあえゝ
えゝゝゝえゝやあゝあれせえゝえ
ゝゝえゝゝやあらあんえ
やあゝあゝれよあゝあゝだあゝえ
えよおおゝおゝいねいやあれええ

ゝえ向うに見えころゝうわゝかすー
みーがあせえきーしよー花わゝなけえ
れーえどおおゝいい桜田御ーおゝもえ
はあそおやれあゝはあれわさんのおそ
おじやよゝよおいさやあえゝえゝゝえゝ
やあゝあれせえゝゝえゝゝえゝんやあら
あんえ

拝十一年

ペン毛筆両用紙 タカラ帳簿 十三号

酒田

酒田出る時涙で出たが
今は酒田の風もいや
そろたそろたよ出羽様小性
秋の出穂よりなほ揃た
此處は何處よと馬子衆に聞へば
此處は佐渡の仲仏道
出羽の羽黒に津軽鐘掛て
ついてはなせば千里びゞく

ペン毛筆両用紙
タカラ帳源　十三号

よい共をよいともをまかせれろやれあれこれは
いれ。やあれをあかあ、、、田あ、出れ
れるう、、、う。ともを、きさんさあのせなあ
あ、えい、、い、い、い。だあでれれ、れ、
でれ、、たあ、、あ、が、、。いまあ、、はあ
あなあ、、れれ、やあ、、れ。さあ、かあ、あ
、、あ、たあ、、、のを、、いれ、、れ。しんどをか
せもをいやあよを、いさあ、さあ、。よいさんさ
のせれ、、れ、かせもいやあじあとれれ。ちをり
やあ、、いよ、をのをやれい、まあ、、。はあ、

。をあかあたあ、、このを、、を、、、れしんどを、か
でもをいやあ。よを、、いさあ、あよいさんさの
を出れ、、、、。

拝十一年、

ペン毛筆両用紙
タカラ原稿 十三字

みなと

港港につく蛍船　波にたこがはの花が咲く

港出る時は心も残る　心変れば又港

又も港へ津くその舟は　鉦をろしてかこ遊ぶ

月でかす舟港で茶舟　沖で大船帆掛船

みなあ、あ、あ、あ、あ、あ、あと、れこ、こ、れ、こ、れ、や

あ、れれこをりやあ、はは。

あ、あ、と、を、こ、れ、こ、れ、こ、れ、こ、れ、こ、れ。

つくうたあかからあふうはれわあ、、

れ、、、、れ。なあ、えい、、たい、いこがあ、

はれ、、のを、を。おい、おい花があさく

よをやをろを、よをやろた。

拝五年

ペン毛筆両用紙
タカラ帳簿 十三号

田歌

あせならば我田となら世君が田と

茂草の山茶屋の娘花かと紅葉か花ならば

しそがずばぬれどらましを旅人の
一枝ほしや宿の土産に

千路へ吹き行く風がとの云はど
あとより晴る野路の村雨

日に幾度も便りするもの

ペン毛筆両用紙

昔より歌讀む人は或部かり式部か

西行の坊様かり野の小町か

立田山紅葉を分けて歩る月は
錦にうつる鏡なりける

拾二が恋をしかけ花さかせ
ちぎりて見れば我が妻となる

拾七が紅かねつけた夢を見た
目さめて見れば元のしらけ

拾七が殿子に送る其此の文はうす墨なれど
中は恋路よ

拙七が所の下ではたを織る
しの才が折れてくだが廻らぬ
昔より弓引く人は八幡大菩薩か義頼か
奈須の与市か島のためとも
君が代は千代に八千代にさゝれ石の
巌となりてこけのむすまで
才教授 清水の舞台の上で舞ふ雅子は
姿は雅子で心は鬼

ペン毛筆両用紙

朗読 石割 [illegible]
よこす、立やれェ、ゑこ
ゑこい、そこおこいしらあ、あこでえ、○しめ、
ゑろ、ゑゝやあれゑゝまかあせゑ、
ゑうゑゑうけゑゝころはゝどっこいせ、
おゝこしやあゝこはあゑゝ○じゃ[illegible]あ
ゑとおゝしたあゝとおゝねゑゝ

タカラ原簿 十三号

君いこいこいこがあこいこ田あこあこあこと
れこれこれこれこれこれこれこれこれこれこれ
れわあこいれ
おこいこいこわあこがあこあこあこ
田あこあこあこあこあこと
れこわあこがあここ田あこと
あこあこせれこやれれこおりやせれこいこよ
おこいこやあこれれこれれこれこれこれこれ
田あこあこの
おこいこいこあこあこ
れこいこれこれこれこれこれこれこれこれこれ
れこれこれこれこれこれこれこれこれこれこれ

れここわあここおここいこあこあこせれここれ
れおこれれれれこわあここおこいこあこあこ
せれこれこれなあこらあこあこせれここいれこれ
れこここよおこいこあここおれわあやあれれわあこ
かああこあこ田あこあこあこあとこいこやあこあこれれこ
わあこがあここ田あことおこおこいこなあこらあこあこせれこ
やれれここりやあこせれこいこいこよおこいこやあここ
れれここれこ君いこいこがあこあこあこ田あこあこの
おこおこおこおこいここあこあこあこせれここれこ

拝　十八年

ペン 毛筆 両用紙
タカラ帳簿 十三号

繪師

咲た桜になぜ駒つなぐ
駒が勇めば花が散る

淀の小橋はあらじかくらか

諸国大名のをりのぼり

淀の川瀬のあの水車

誰を待つやら来る来ると

河原なでしこ野に咲く野菊

そこでその根が引にくい

今度来るならもて来てたもれ

伊豆の御山のなぎの葉を

したい山崎おりめの里は

油しめ木の音がする

せたの虚稿虚金ぎ星

水に影さすせゞの城

ペン毛筆両用紙
タカラ帳簿 十二号

枠は中枠（用紙より狭くする）

維師朝　珍重

兄不遣師

声いこおこしよお。あれこりやどうこい
よおこいよ　おいよおおよおおよおこおいえ。
兄こしいいでえこしよおおこおこおこでえまあ
ああがたあこえこしいいでえこしよおこ。

弟不遣師

いよおこおこおこえ。あよおこおこえ。いや
あこれえれわあいこれ。おこんごりよがおこながい
うもえ。兄こえしいこでえこしよりこでまあこ
あこたあこえこここしいこでえこしよおこ。

ペン毛筆兼用紙　タカラ帳簿　十三号

兄不遺所

おこおこおこおこおこたあこまかあまかせろ
なこいこたあこれこりやれ。こくうこうあこに
いここよおこいこよおこいこは。なあこせこ
おこまあこれこおりやなせこまあこうこなあ
ああくうれおこれおこてまあこたあこいこえ
ここいこでこここしよおここれおこおこあ
こあこあこなあここあこあこ駒あここあこあこがあ。
れここええやあここれやれやれこれこれこん
よおこいこよおこいこは。いこあこめこれば

れこりやあこれめここばあこれこりやな。
ここれおこれわあこはあこなあこあこあこ
があこあるうこうこよこここここここここや
あここれせこここ。御おこここ代おおおわ
あこなこほなあこんほなあんぼおお。ここめ
ここれれおれここれこまあこたあこいこえ
こここここここここここここここここここ
こここここここここここここここここここ
こここここここここここここここここここ

日光

御世は目出たの若松様よ
枝も栄えて葉も繁る

峯の小松たしなる鶴掛て
谷の流で亀遊ぶ

朝の野に出て若菜をつめば
露しとづまが皆ぬれる

つゞまぬれても心はぬれぬ
妻と定めれや皆ぬれる

今度御座らば持て来たもれ
伊豆の御山のなぎの葉を

一度二度云うて忘じはよしな
猿の木登りや落ちやしまい

ペン毛筆両用紙
タカラ帳簿 十二号

御師
珍重より入る

御を代を、、は。れ
れ、毛。れ、れ、、度あ、のを
御代を、はあ、月。毛度あ、のを、れ、、
れれ、、れ、、。若あ、まあ、う、、うさあんあ
あ、あ。まあ、、よを、、を。よれれ、、
れ、れ。れ、、だあ、。あ、もを、。さあ、、かあ、
ああ、かあ、ああ。あ。あ、あ、。あ、、れ、
れ、、あ。うりあ、、あ。れだあ、もを、。さかれ、、
てれよ。あ、れやあ、ああれれ、。やあ、れ兼。

第、月毛度あ、のを、れ。月
あ、、れ、、れ、、度あ、のを、あ、、を、りやあ、。

ペン毛筆両用紙

タカラ銀箔 十三号

あ、、あ、、あ、れ、、、れやあ、あれ毛れ、、れ
れ。兼。あ、、あ、、れやあ、れしい。げれ、るう、兼。れ
しげるれ。れ。いよを、兼。れを、。しげるとを、れ。

れいれれいれいれれしめろをやれい
えいいまあかあいいしよきまかあしよをとき
れいえいれれいのをいえれよをどさあいよい
きあれうをいいまあいあいあいいいういうにあ
ゆきりあいあいゆのきしまあいうにれれいえ
れれいれしなあいうるいうかあいいああ
あいけれいいてえいいれいれれれいれい
れたあいたいいのをいなあいああいあい
なあああいがあいいあいあいあいあ
でいあいゆきりやあいたにのをながあれで

なあいえやあいあれれいやあいあれかあいあ
いめれいんやあいあれせれかあいいめやあれ。
あいゆきをいいかあああゆいれいいよかめれいあゆ
ぶとれ。

ペン・毛筆両用紙 タカラ帳簿 十三号

八津志ょ目

やあ、しよめやあ、しよめえ、まかせろやあ
あれえこおれはい、ね。しいめえったあ
ありい、えい、えい、えい、やあ、れ
これはあさんこのおさんこのさんこの ね。
さあ、しいめえ、、たあ、りい、やあ、
あ、れこれはあ、えい。ごくうろあ、、
ながあ、らもあ、（以下野曾哉筆）

あ、いさんこお、のお。おいふしかあ、
まこおとにい、さんえごおえれえ。
えいやあ、らあ、はれはさあ、のおえ
おじやあ。じよさい、はあ、ござうぬう、
えんやあ、、、らあ。えい、、えい、、
えさあよおい、、い。まあ、、だあ、も
おやあ、しよめやあ、しよめやあ。

ペン毛筆両用紙
タカラ帳簿 十三号

松坂

兄 松坂越えて明星の
茶屋勝掛、ながむれば

兄 立てば芍薬、居直れば 弟月は愛で見るべきれど われはたしかた明じ星
さても優しきお姿よ

弟 あゆむ姿は百合の花
さても見事な牡丹花

兄 夜の梅をば見て戻れ
主ある人の八重さくら

弟 それにひきかいひとり称は
さびしき事の山桜

兄 為津百淀と山吹きの
身のなき事と思へども

弟 せめて一筆書きつばた
まだ芍薬のねはきれぬ

兄 不孝蔵 たのみた思う蓮の花
まだ芍薬のねはきれぬ

弟 たのみた思う御仏の
前に供へし蓮の花

ペン毛筆兼用紙
タカラ帳簿 十三号

まつうこどもあいこりやね
ええ。ええみよいこを。ごしよいこを。この
をを。ええよをいさをよおいさこあね。おいちやいこ。
やあにいこいこいおこしを。ああいこけえ
ええ。ええながいこあ。むこういこれこい。
いばあいこいこあいこあ。やあいこきと
をこをせいここ。ええこここ。よをいこよお。
ををいいこ。よおいやあああいねこ。里あ
あせ。ええやあいこあらああ。おを。

ペン毛筆両用紙

ええここう。ええうこう。ええ。このお
おいこいえいこはあやれこりやね。

ええここう。ええこういこえ。いこのおいこ
いえいこはあやれこりやね。

唐念寺

打てや打てく備後の表

明日は船の帆を上げる

船は出て行く帆あげて走る

宿の娘が出て手まねく

此處は何處と馬子衆に問へば

此處は信濃の仲仙道

此處は何と船頭衆に問へば

こゝは蓬島の植の浦

今度御座らばとて手たもれ

伊豆の御山のなぎの葉を

御吉野の山路にかけし花笠を

我が子に着せ御吉野の花

七つ子が八つ子に送るもづさを

いたゝ書きし文の上書

私が国さで見せたい物は昔谷風今達磨形

ゆかしなつかし豊城のこのうち他にないぞや松嶋ばかり

私が国さで見せたいものは秋は鳴く鹿ふほとぎす

泣き流れのきぬたの音より他にないぞやたごとの月より

ペン 毛筆 両用紙
タカラ帳簿 十三号

ほあれこうこよおこおこいえう
ゆりやれうれうこね。れこれんやあここお
おのおれこまあこよおこおいな。やれうこ
うこれこやあここおこいうこゆりや
うこうこうこは。れこれんこおおられこおも
おこれこおこおいな。やあれ明日ういわ
あここおこおい船はれこえこのお。ほお
こほおにいほおここなあやあれあここ
こげれこるうれここ。しよんがあれこゆおこ
りやあゆおこいらあここあここでれ。し

ペン毛筆両用紙

んこいめれわおここまあこがあせれいれこ
これこ。うこけれわおこおここやあれほお
えこにいここお。こまこおことおこにいこえれ
れこゆれれもおゆおこおこじやあよおこ。れこ
れこれこれいれここれこえうこれいやこおのお
おこれこいこよやあこあれおこおいなあやあれ
明日ういわこおこい船れこの帆おこ帆に帆おこ
な。あやあれこれこここよんがあいれここゆおこ
りやあ。よおゆうくたれここうこれこゆうたあ
あよおこれここれこゆおこおれれいわあもつとお

もなりけれるうゑなあさかあさこのおこ
つうこなあしれこほ
おれ。

椿十七年

ペン毛筆両用紙
タカラ帳簿 十三号

絵師 返し

いーよおーおーきあよおーおーんえ。
いやあれこれれわあいね おーーそこ
おでんうたいのおーお。
いーーよおーーおーおえーーえ
えーーえーえーえ。はあれれーあーーきあ
のおーえーーえーーえーーきあよおーーいー
いのおーえーーえーーえーーはあーーれーえーわ。
あはあれれーわーはあーれわあきあ、

のおーお。えーえーえ
えしよおーーお

ペン毛筆両用紙
タカラ根源 十三号

使う身になつて造る

登録商標

タカラ帳簿

三十余年の伝統が誇る

類がある
類がない

小田原市幸二

桜井

小田原木造保存会

櫻井賀之所有

タカラ和式帳簿製造種目

品番号	帳簿名	綴	枚		数
10号	三段5行	50枚	100枚		
11号	立罫5行	50枚	100枚		
12号	立罫7行	50枚	100枚		
13号	立罫10行	50枚	100枚	200枚	
14号	三段下蓙付		100枚		
15号	立罫12行	50枚	100枚	200枚	
16号	二段罫		100枚		
17号	三段罫	50枚	100枚	200枚	300枚
18号	三段替入	50枚	100枚	200枚	300枚
19号	四段罫	50枚	100枚	200枚	300枚
20号	三段(特殊)6行		100枚		
21号	三段(特殊)11行		100枚		
22号	付込帳		100枚	200枚	
23号	二段用		100枚	200枚	300枚
24号	二段月日	50枚	100枚	200枚	300枚
25号	二段月日替入		100枚	200枚	300枚
26号	三段8行		100枚		
27号	二段月日8行		100枚		
28号	当座帳		100枚		
29号	金銭出納帳	50枚	100枚	200枚	
30号	売上帳		100枚		
31号	仕入帳		100枚		
32号	出納帳		100枚		
33号	二段月日16行		100枚	200枚	
35号	判取帳		100枚	200枚	
36号	出勤簿	50枚	100枚		
33号	月掛帳	50枚	100枚		
40号	宿帳(みの判)		100枚	200枚	
	枕帳(金銭及荷物判取)	1丈・・・7丈			
	大福帳	3丈・・・10丈			
	大和手帳	1丈・・・3丈			
	質物台帳		100枚	200枚	
	流質物台帳		100枚		
	古物台帳(洋式)	50枚			
	判取帳(クロース張)	50枚	100枚	200枚	
	玉帳	50枚	100枚		

◉別註帳簿御好みに応じ調製致します、

◉次回お買求めの際は品番号及何枚綴と御下命下さい、

◉帳簿は営業上大切な宝ですから特に製本に留意して居ります

9-3　記事

明治四二年（一九〇九年）一月一三日（横浜貿易新報）

「一昨日の消防出初式」

「▽御用邸前の壮観△

▽勇ましき□□□し△

新年式事の一に数へられし小田原町の消防出初式は一昨十一日小田原町御用邸前堀端に於て挙行せられぬ式場の中央には高サ百三十尺の丸太棹を立て竿頭には経一尺程もある張子の達摩をば吹筒の水力に依りて上下なし得る楼の装置となし郡役所前より裁判所前小学校前等に至る堀端一体の路傍には各方面消防組の部署を定めたる立札を建てあり本部の位置は女子裁縫学校前其他右には新聞記者、各町村長其他来賓席を設けたり」

明治四三年（一九一〇年）一月一三日（横浜貿易新報）

「小田原　消防出初式」

「小田原町全町の消防出初式は十一日午前九時より御用邸前広場にて挙行し、先づ本県警務課長代理岸本保安課長の点検あり夫より梯子乗りありて次に例の注水試験の達磨落しあり終りを告げしは午後一時半頃なりしが小田原署にては所長初め署員総出にて指揮し郡役所よりは郡長其他町役場よりは今井町長宮田助役等立会せしが常日生憎雨天にて雪さへ交り寒気烈しかりしにも拘はらず一同何れも奮励し好成績なりしが見物人も雨天を厭はず詰掛け殆んど立錐の地も無き盛況なりき」

大正六年（一九一七年）一月七日（横浜貿易新報）

「恒例の出初式」

「▲勤労者を表彰す

小田原町消防組二十六分隊は毎年一月十一日小田原町御用邸前に於て出初式を挙行し終つて郡役所に於て執行官よりの□□いるが例にて本年は小田原消防組に片浦、早川、大窪、寺町、□□、山王、酒匂、□□、□□□□村の諸うっぽうくみと連合の下に同日午前くじより御用邸前に於て執行し梯子乗り及び放水試験等を行ひて下郡役所に於て各組小頭、組頭列席の上勤労者の表彰式を□ぐる□なり」

大正七年（一九一八年）一月一二日（横浜貿易新報）

「御用邸前の壮観」

「◇小田原連合出初式

小田原町御用邸前の御濠端に於て行はる恒例の消防出初式は寒晴れの昨十一日午前九時より挙行された参加消防組は小田原町内の廿一組に寺町、井細田、多古、荻窪、山王、一色、酒匂、小八幡、板橋、風祭、水の尾、早川、石橋、米神、根府川等の

▲管内三十六組　にて村落の舞台は未明より小田原町を指して詰めかけ幸町一丁目を埋めた。斯くて八時半□□た寒天に鳴り響く喇叭の音を合図に小田原消防旗を先頭に谷田組頭引率の下に歩調を揃へて箱根口を迂回し式場なる御用邸に入り込み定めの席に着くと切目正しい

▲一斉に放水し　て各威力を示したが飛沫は□と降り旭光に映じて御用邸の松の□を五彩に染め壮観を□む斯くして式を終り各組の小頭以上は郡役所に集合□□の廿年余り勤労消防夫百二十名に対し石黒所長より表彰状を授与し訓示及び列席者の祝辞あり□に全く出初式を了した」

大正九年（一九二〇年）一月七日（横浜貿易新報）

「小田原町の鳶職組合紛憂」

「組合員が芸妓（げいしゃ）の箱持したとて　小田原町内の鳶職組合員中には毎年出入の芸妓屋に雇はれ三ヶ日間箱丁の代りを為し芸妓の供を為す者あるより他の組合員は鳶職組合の面目を損傷くるものと為し一昨年末猛烈なる反対を為し為に昨春は全部芸妓屋の出入りを断りたるが年頭芸妓の出入は収入頗る多く一日七八円より十円に当るを以て前年反対せし七八名が本年は箱持を成し芸妓の供を成したるより全組合員は頗る憤慨し除名処分を成さんと目下寄りく協議中なれば来るべき新年総会には非常なる紛憂を想起すべき形成なりと云う」

昭和五年（一九三〇年）一月五日（横浜貿易新報）

「小田原出初め」

「小田原町大窪早川連合消防出初は十一日小田原御濠端で行はれる」

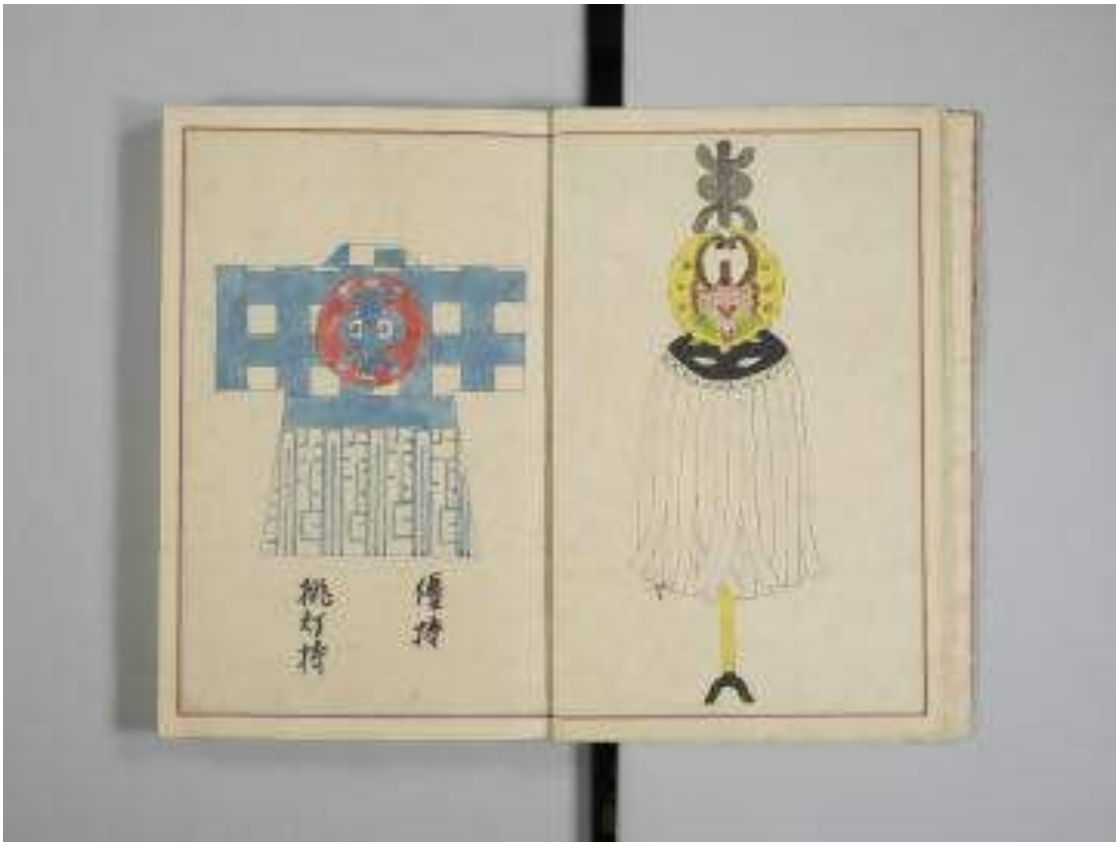
昭和一二年（一九三七年）一月一二日（横浜貿易新報）

「合併消防出初式」

「小田原町並に早川大窪両村合併消防出初め式は例年十一日挙行されたが本年は大日本消防協会松井博士の講演関係から十六日に延期されたので十一日鳶職一二番組の梯子乗りだけ行った」

9-4　旧小田原藩町方火消纏雛形（小田原市立図書館所蔵、おだわらデジタルミュージアムより転載）

町方火消提灯形燈
武蔵屋入
代官町


提灯
桃灯持

東
東紙
太行
東所

東
東
青物町

西

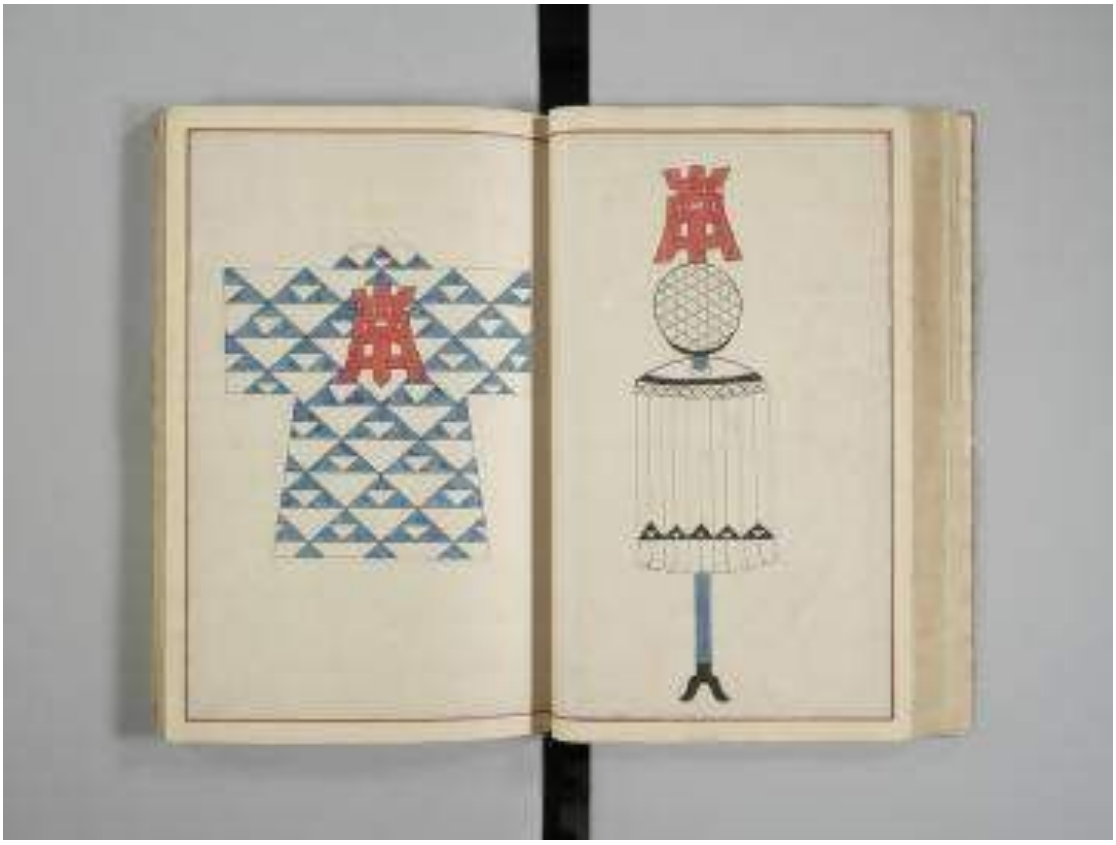
西条
貢茶行
須藤町

須
吉新宿町

西
竹花町

大工町

大工町



高橋昭

高
茶畑町

茶
南
茶
泉
茶畑遠橋町

北組
萬町

北

山角町

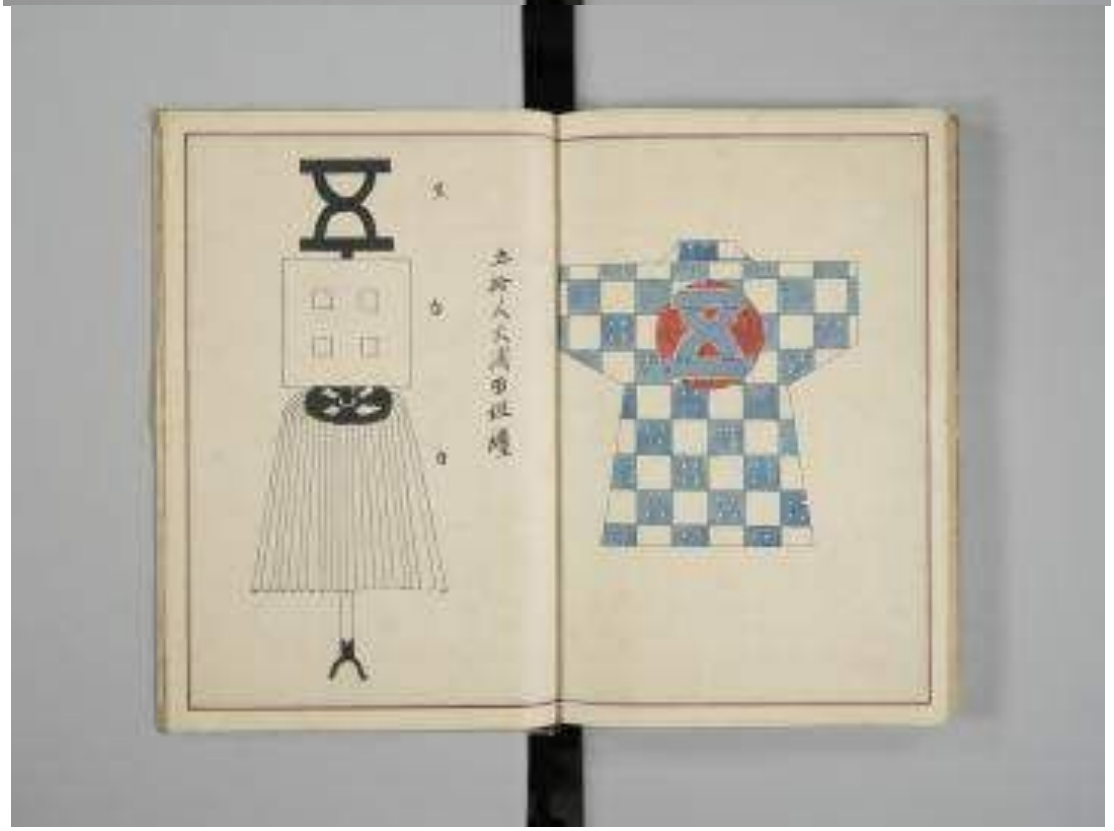
堂宿町

中宿町

宮前町

五十人組
宮

小組



右ハ遠ク北産ノ品上
文政十一戊子年四月　所年寄
加藤惇君所贈也

9-6　話者

小田原市鳶職組合組合長　金子正房（昭和三三年生）

小田原市鳶職組合副組合長　大木孝一（昭和三四年生）

小田原市鳶職組合副組合長　湯川吉寛（昭和四三年生）

参考文献

小川建設「梯子乗り」（https://ogawakensetu.tobiiro.jp/hasigo.html、二〇二四年五月一〇日閲覧）

小田原市立図書館編　一九七五年『小田原市立図書館郷土資料集成1　明治　小田原町誌　上』小田原市立図書館

小田原市立図書館編　一九七五年『小田原市立図書館郷土資料集成2　明治　小田原町誌　中』小田原市立図書館

小田原市立図書館編　一九七八年『小田原市立図書館郷土資料集成3　明治　小田原町誌　下』小田原市立図書館

小田原市企画調整部文化室編　一九八九年『小田原地方新聞記事目録』小田原市文化室

小田原市編　一九九〇年『小田原市史　史料編近世Ⅲ藩領2』№一〇八、小田原市

小田原市　一九五一年「消防始式」『小田原市報』第一〇号、小田原市役所

小田原市　一九六五年「お城まつり」『広報小田原』第一八二号、小田原市役所

仙台市教育委員会　二〇一七年『仙台市文化財調査報告書第432集　仙台消防階子乗り民俗文化財調査報告書』仙台市教育委員会

高橋元治　二〇一三年「鳶三代、高橋組」『小田原史談』第二三五号、小田原史談会

東京の消防百年記念行事推進委員会編　一九八〇年『東京の消防百年の歩み』、東京消防庁

戸澤利雄監修、創立一一〇周年記念誌実行委員会編　一九七五年『小田原鳶職組合　創立一一〇周年記念誌』小田原鳶職組合

西山松之助編　一九七八年『江戸町人の研究』第五巻、吉川弘文館

松原神社明神會　二〇一五年『松原神社　明神會　二〇周年記念誌』協和印刷

山本純美　一九九三年『江戸の火事と火消』河出書房新社

横浜貿易新報社　一九一〇年「小田原　消防出初式」『横浜貿易新報』一月一三日、横浜貿易新報社

横浜貿易新報社　一九一七年「恒例の出初式」『横浜貿易新報』一月七日、横浜貿易新報社

横浜貿易新報社　一九二〇年「合併消防出初式」『横浜貿易新報』一月一二日、横浜貿易新報社

横浜貿易新報社　一九三七年「小田原町の鳶職組合紛擾」『横浜貿易新報』一月一二日、横浜貿易新報社

ピッチがほとんど下がっておらず、音楽的に高い技術を持っていたことがうかがえる。現在は①と比較すると細かい装飾が簡略化されているものの、基本的な曲の形を伝承しており、また木遣りを歌いながら棒を使って地附きのリズムを取るという伝統を保持しているといえる。

ただ、カワの歌唱中に徐々にピッチが下がってきてしまうのが残念である(歌い出しと比較し半音ほど下がっている)。①と③の音源ではピッチはほとんど下がっていないため、ピッチが下がっていくのは本来の歌い方ではないのではないかと考えられる。

注) 2024 年 10 月 27 日戸塚区横浜市消防訓練センター(神奈川県横浜市戸塚区 777)で開催された「第 33 回文化部研修大会」((一社)神奈川県鳶工業連合会)にて小田原市消防木遣の湯川吉寛(ゆかわよしひろ)氏に聞き取り

10-２　鳶職木遣採譜所見

寺田　真由美（京都芸術大学非常勤講師、相模女子大学非常勤講師、玉川大学非常勤講師、および横浜市無形民俗文化財保護団体育成検討会検討委員）

［採譜音源］

①「真鶴」（「CD 木遣り集」昭和 47 年 2 月制作）

小田原過去（昭和 47 年 2 月制作）

②「真鶴・手古」（文化部研修大会第 26 回小田原鳶職組合）

小田原現在（平成 26 年録音）

③「真鶴・手古」（文化部研修大会第 26 回川崎）

川崎現在

④「真鶴・手古」（令和５年小田原鳶職組合木遣唄練習）

小田原現在（令和５年録音）

【現状】

小田原古式消防に伝えられている木遣りは、「一声会」によって伝承されている。この「一声会」は大正 14 年（1925 年）に鳶職木遣の保存会として組織され、現在でも鳶職によって担われている。木遣は昭和の始めくらいに東京から来た桜井先生という木遣の先生（小田原市全域で教授）から教わったと伝えられている。

披露の主な機会は１月小田原市の出初式、５月の「小田原北條五代祭り」、11 月「神奈川県鳶連文化部研修大会」と少なく、さらなる機会があればうれしいとのことである。

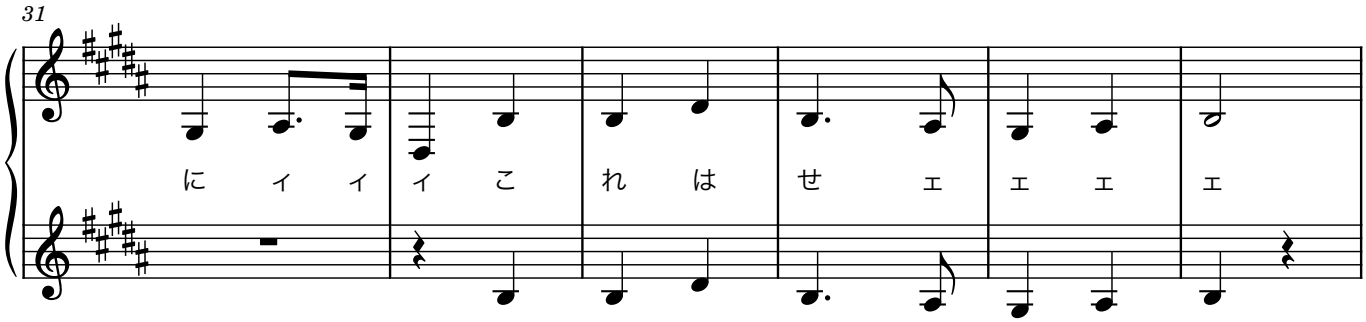
現在伝承されている曲は《真鶴》《手古》《石割》《珍重》《衛士》《松坂》《駅路》《黒鉄》《三河島》等 60 数曲あるが、実際歌唱機会のある曲は 10 曲ほどである。楽譜はなく口伝で伝承しているため習得が難しい。そのため鳶職以外からも木遣をやる人を募っているが、現状では応募者がいない。（注）

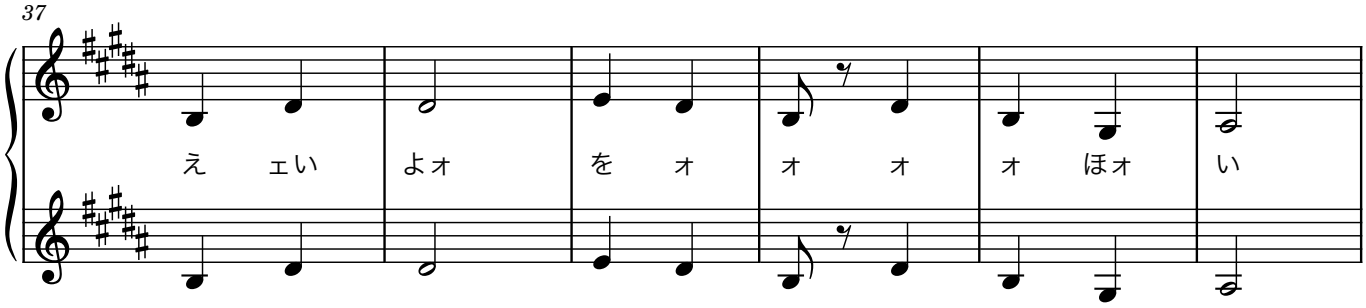
【木遣に対する所見】

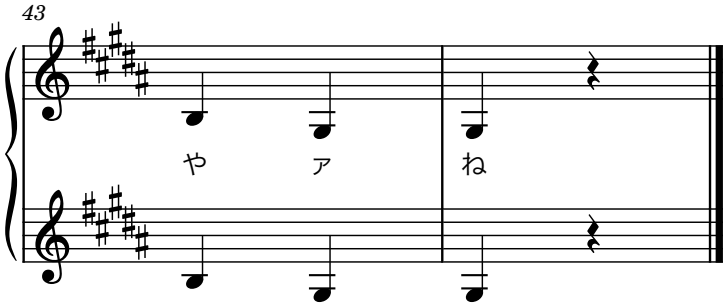
《真鶴》《手古》は、ともに江戸系木遣では必ず歌われる曲である。両曲ともに「木遣師」（音頭）と「カワ」（一同）との掛合いになっている。小田原古式消防の「一声会」が伝える《手古》は、現在東京で「江戸木遣り」として保存会が伝承している同曲とは随所に違いがみられるものの、江戸系木遣りの影響を大きく受けているといえる。《真鶴》は「江戸木遣り」とほぼ同じである。

なお、③の川崎市の《真鶴》《手古》と、現在の②④とはほぼ同じといっていいくらい似通っている。伝承ルートは現在調査中である。

小田原古式消防木遣りの新旧の音源を比較すると、①の昭和 47 年の録音と現在とでは、特に《手古》の部分がいくつもの点で異なっている。採譜を見比べるとわかるように、①では音の装飾が多く、また掛合いも頻度が高く行われている。そしてアカペラの掛合いで７分近く歌っているにも関わらず、曲の最後まで

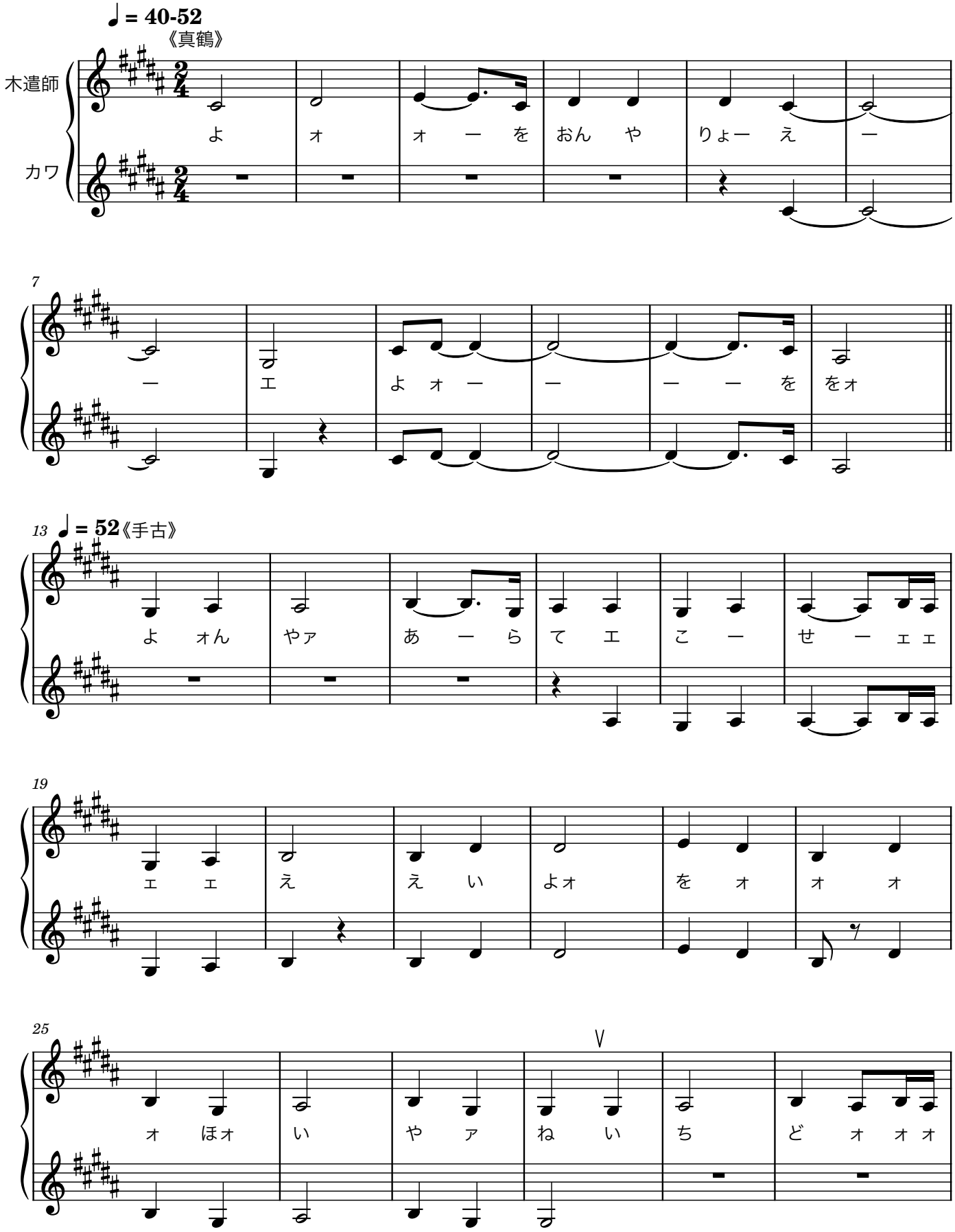

31
に ィ ィ ィ こ れ は せ ェ ェ ェ ェ

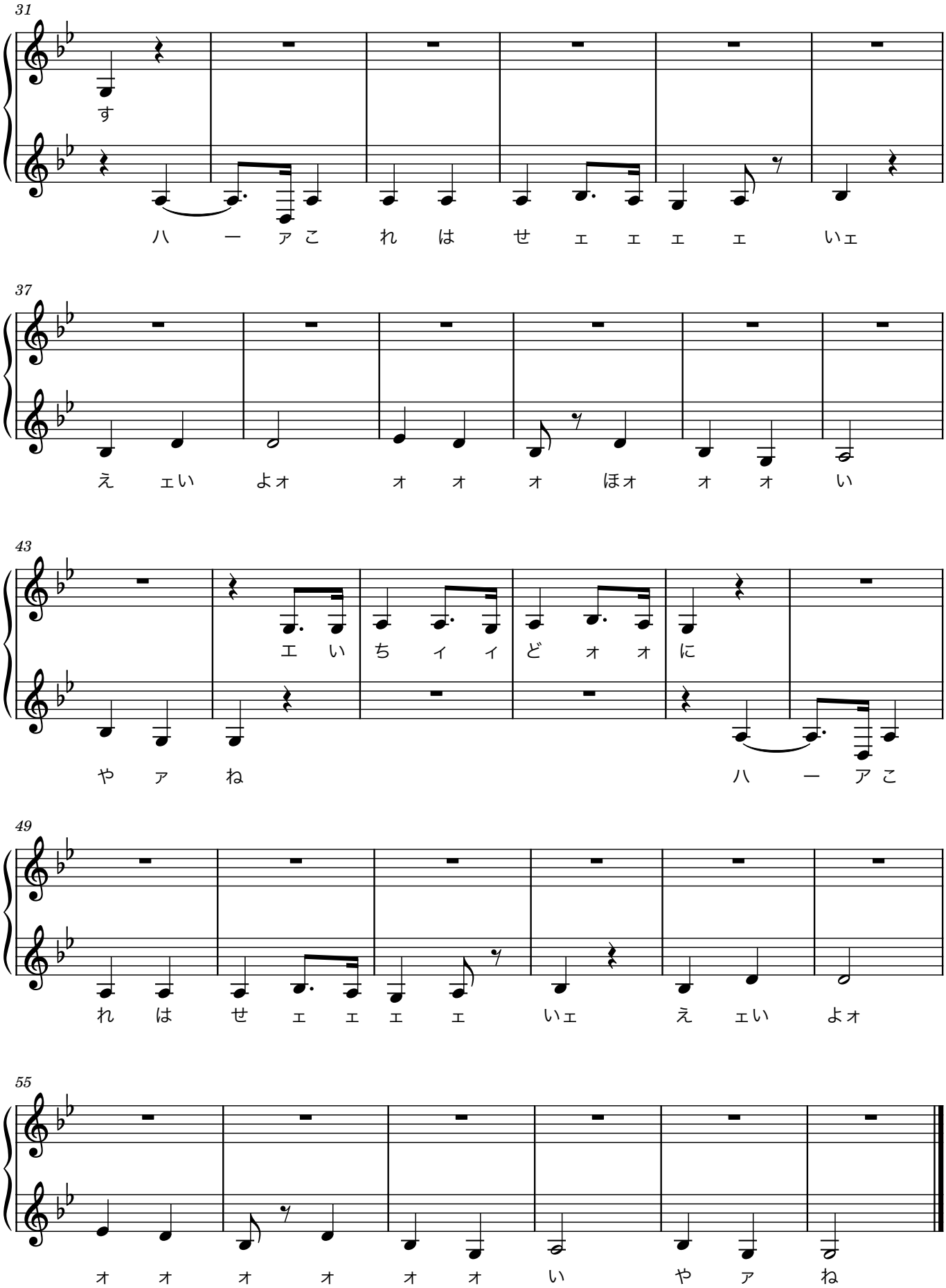

37
え ェい よォ を ォ ォ ォ ォ ほォ い


43
や ァ ね

小田原古式消防木遣《真鶴》《手古》

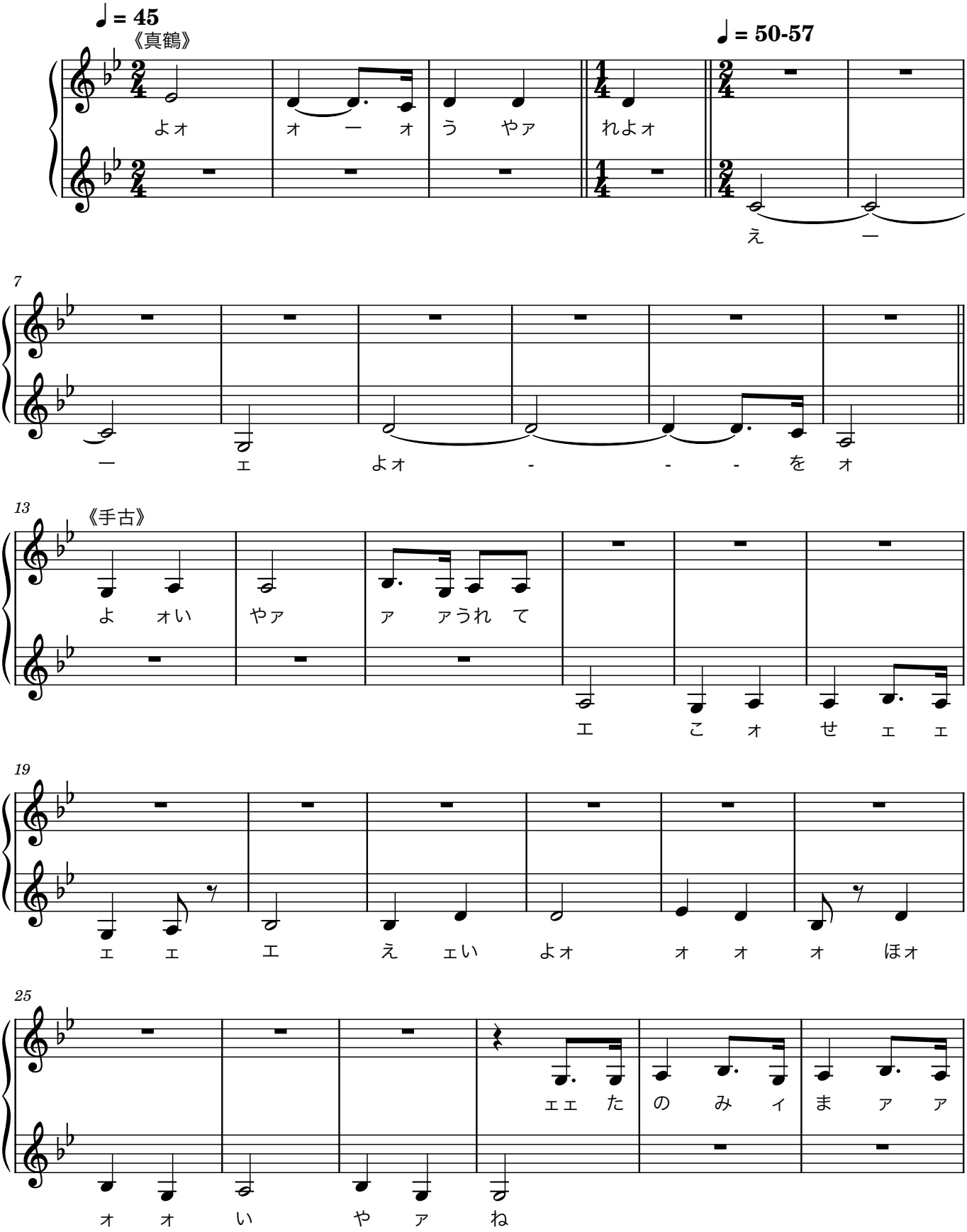
2023年練習動画(採譜：寺田真由美2024年７月)

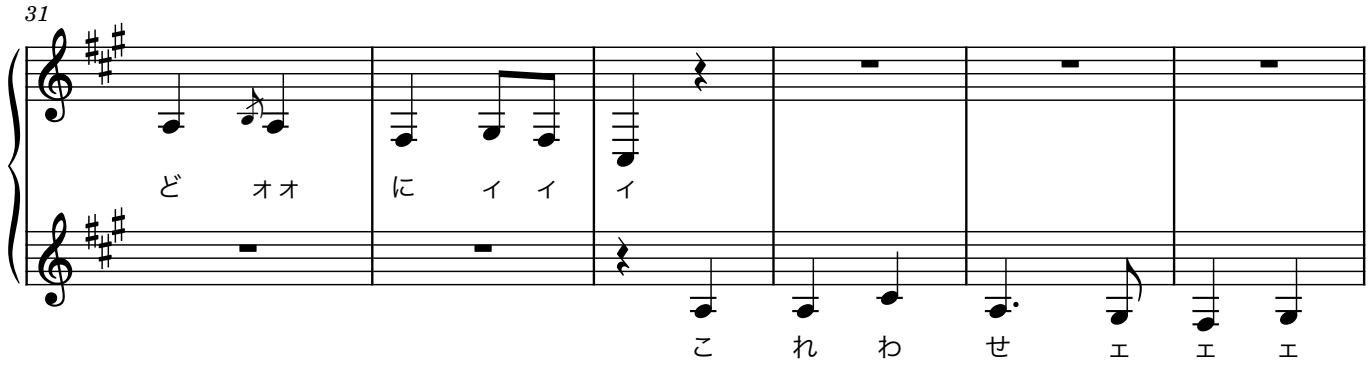


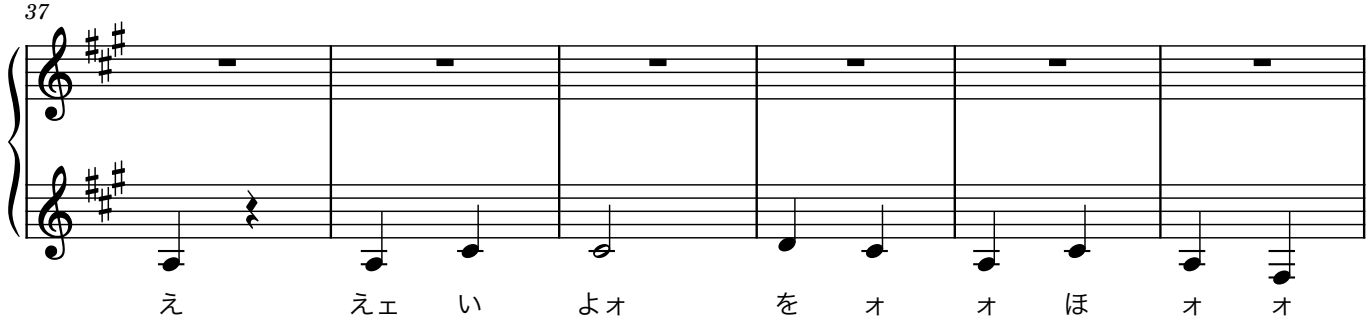

31
す
ハ ー ァこ れ は せ ェ ェ ェ ェ いェ
37
え ェい よォ ォ ォ ォ ほォ ォ ォ い
43
エ い ち ィ ィ ど ォ ォ に
や ァ ね ハ ー ァこ
49
れ は せ ェ ェ ェ ェ いェ え ェい よォ
55
ォ ォ ォ ォ ォ ォ い や ァ ね

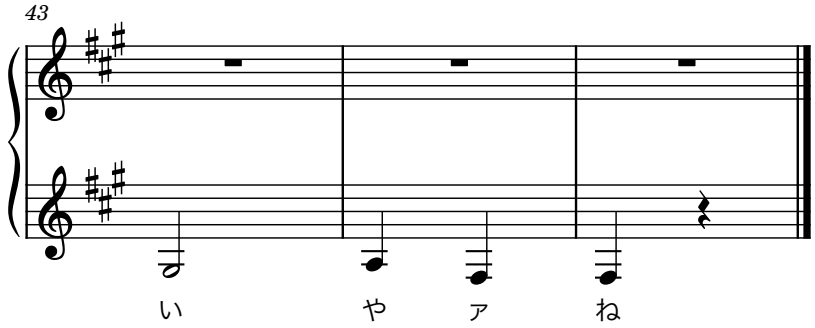
川崎鳶職組合木遣《真鶴》《手古》

(採譜：寺田真由美2024年７月)



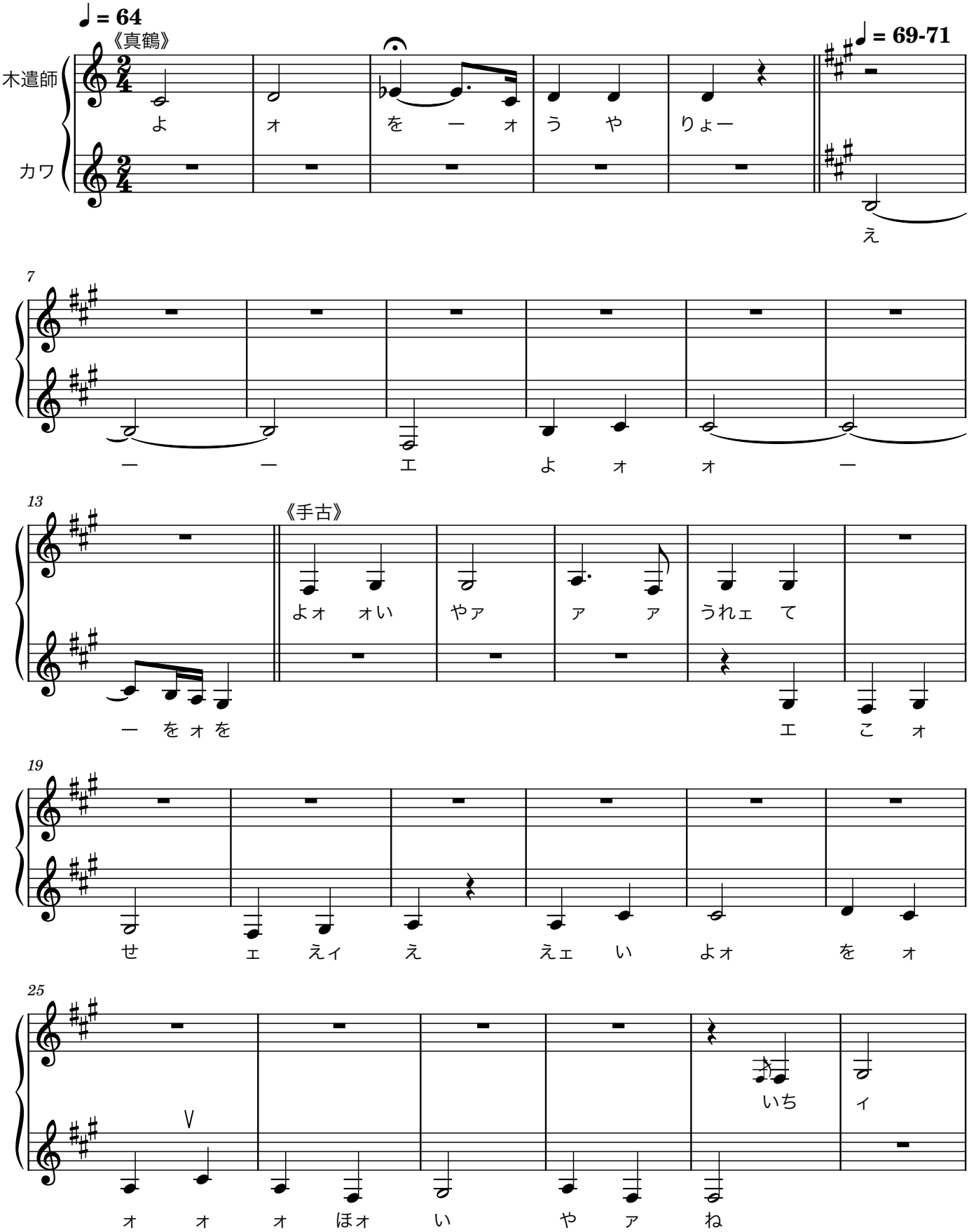

31
ど ォォ に ィ ィ ィ
こ れ わ せ ェ ェ ェ


37
え えェ い よォ を ォ ォ ほ ォ ォ

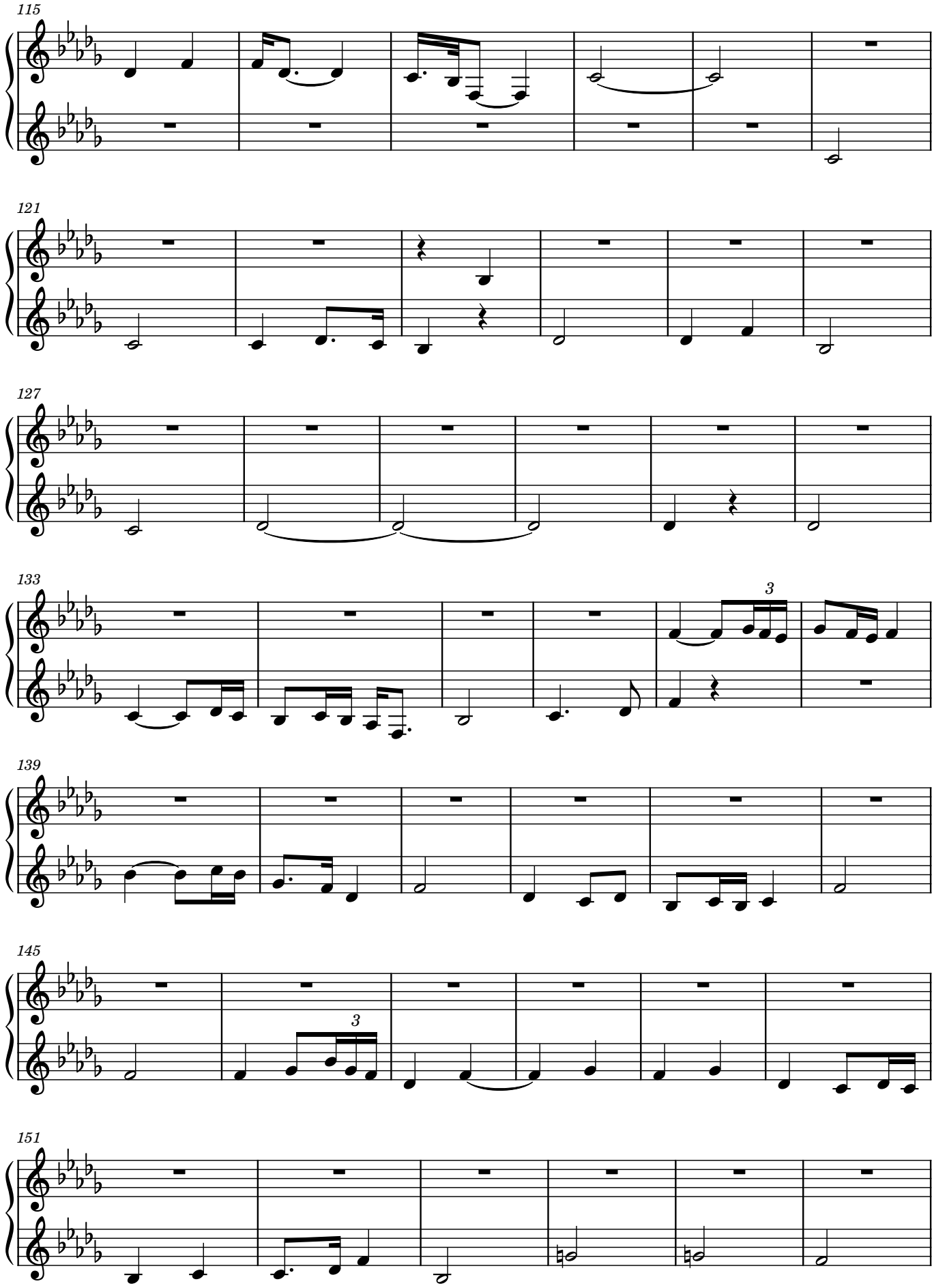

43
い や ァ ね

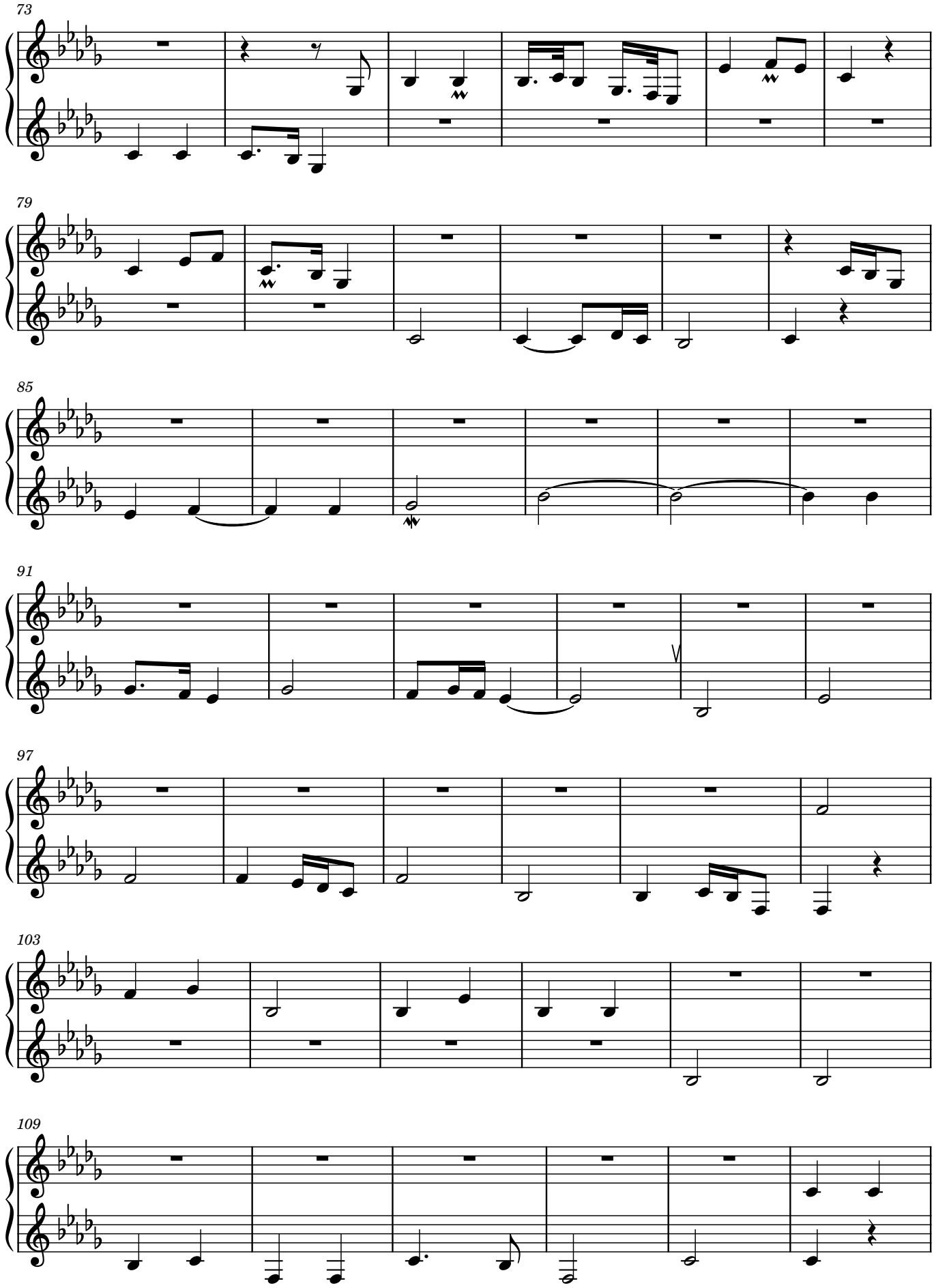
小田原古式消防木遣《真鶴》《手古》

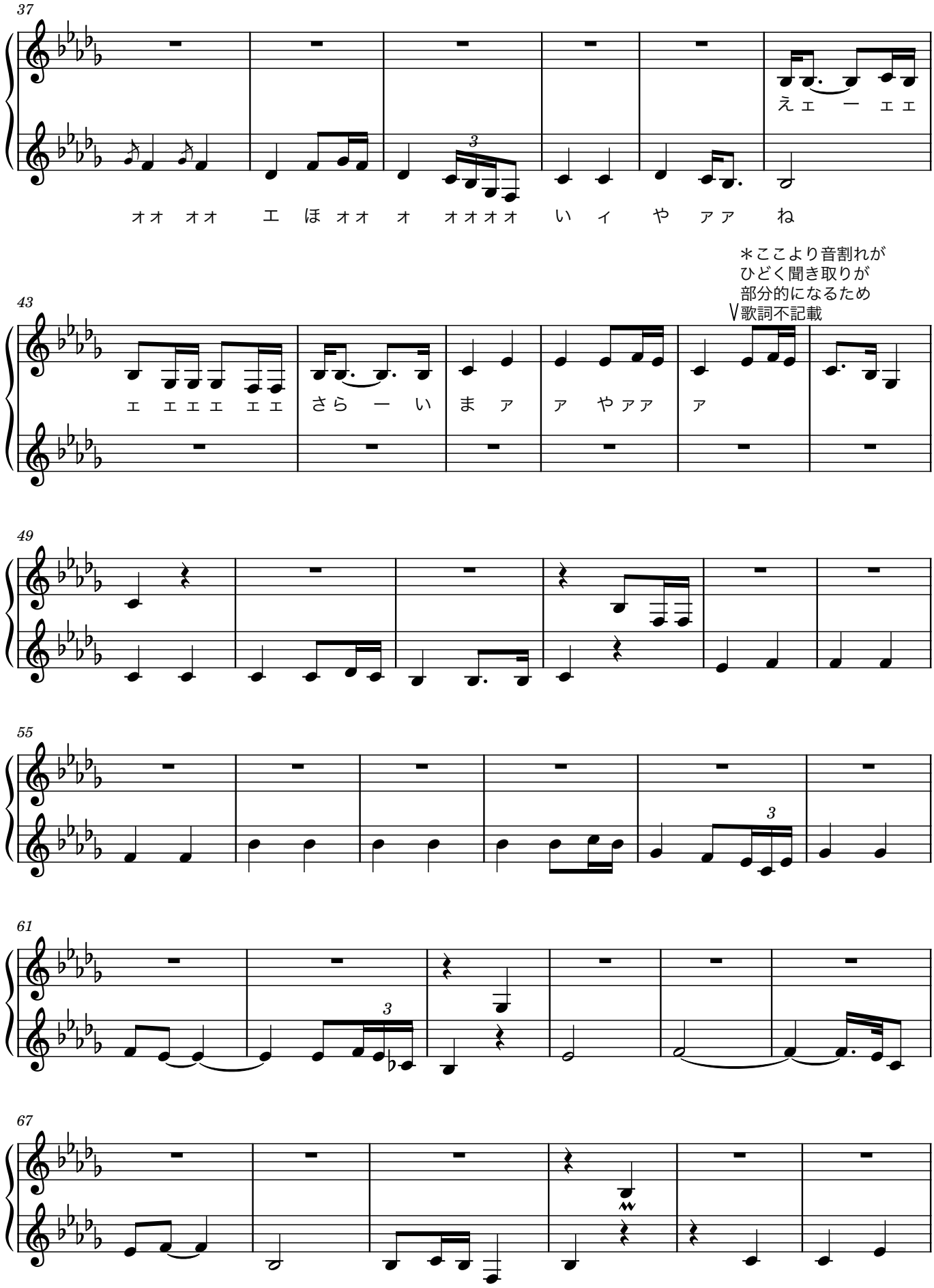
平成26年録音(採譜：寺田真由美2024年7月)



157
163
169

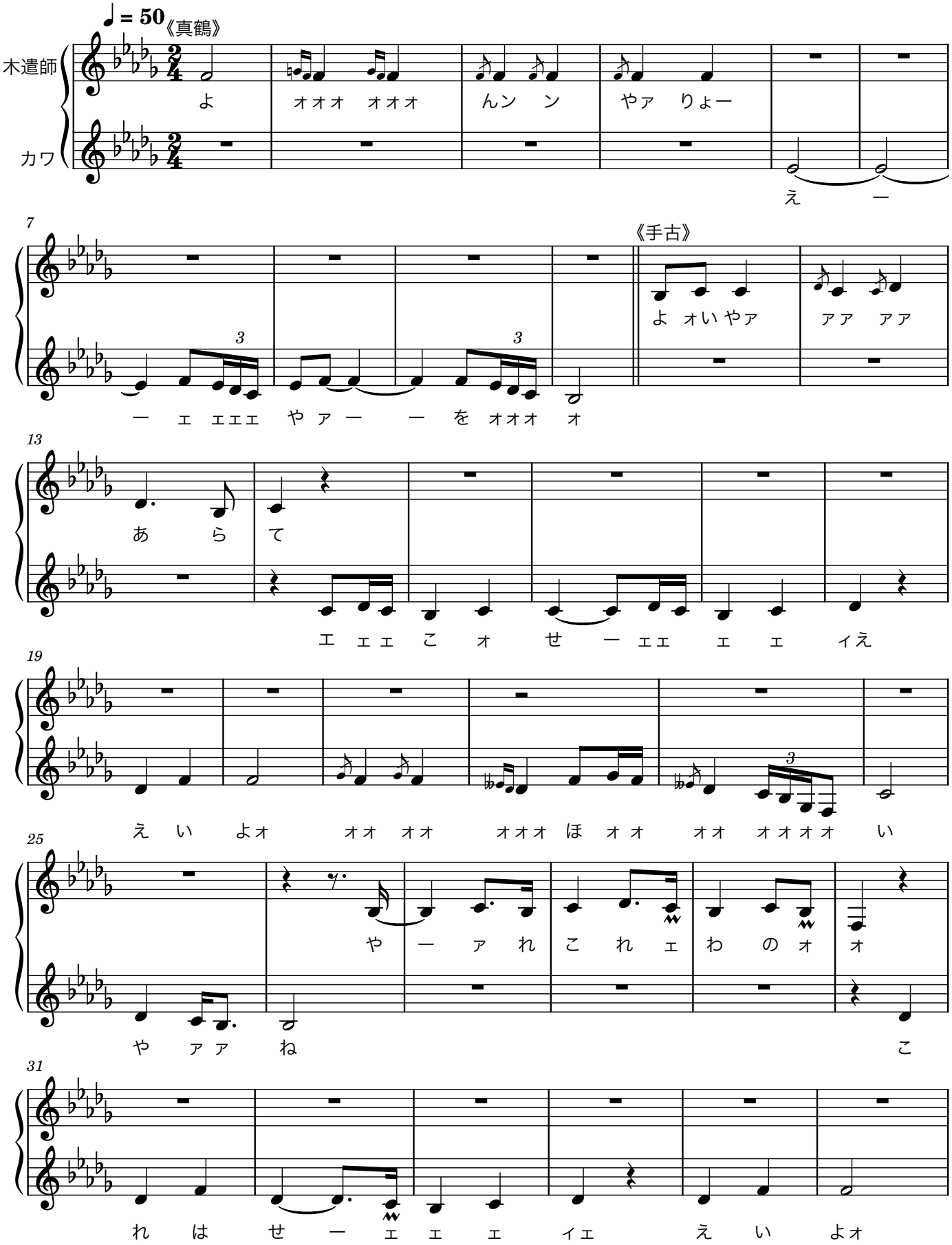

115
121
127
133
3
139
145
3
151


73
79
85
91
97
103
109


37
えェ ー ェェ
オオ オオ エ ほ オオ オ オオオオ い ィ や ァァ ね
＊ここより音割れが
ひどく聞き取りが
部分的になるため
歌詞不記載
43
ェ ェェェ ェェ さら ー い ま ァ ァ やァァ ァ
49
55
61
67

小田原鳶職木遣《真鶴》《手古》

昭和47年録音CDより(採譜：寺田真由美2024年7月)



10　楽譜と採譜所見

10-１　楽譜（採譜：寺田　真由美［京都芸術大学非常勤講師、相模女子大学非常勤講師、玉川大学非常勤講師、および横浜市無形民俗文化財保護団体育成検討会検討委員］）

［採譜音源］

①「真鶴」（小田原鳶職組合、一聲会、小田原木遣保存会、木保睦会、CD「木遣り集」昭和 47 年 2 月制作）

②「真鶴・手古」（小田原鳶職組合、文化部研修大会第 26 回、平成 26 年録音）

③「真鶴・手古」（川崎鳶職組合、文化部研修大会第 26 回、平成 26 年録音）

④「真鶴・手古」（小田原鳶職組合木遣唄練習、令和５年録音）

小田原古式消防調査報告書
発行年　第１版　令和７年３月
　　第２版　令和８年７月
編集・発行　小田原市教育委員会
　　神奈川県小田原市荻窪 300 番地
　　小田原市文化財課
　　TEL　0465-33-1717